

深沢克己教授退職記念対談

フランスとアイルランド——共通の歴史、差異の歴史

深沢 克己・勝田 俊輔

聞き手：クリオ編集部・深沢先生・勝田先生大学院ゼミ生

於赤門総合研究棟 739 号室

司会：深沢先生、勝田先生、本日はお忙しいなか、クリオの会の企画に時間を割いていただき、誠にありがとうございます。また、本日お越しいただいた皆様、お足もとの悪い中、クリオの会の催しにお集まりいただき、誠にありがとうございます。

本日の深沢先生、勝田先生の対談は、「フランスとアイルランド——共通の歴史、差異の歴史」と題し、クリオ 28 号に収録予定です。対談のテーマは、深沢先生のご希望であえて設定せず、自由な対談が行われる予定ですが、お二人の先生に共通する視点として、周縁的な領域からヨーロッパ史の構成を考えようとする点があげられます。皆様、お手元に 12 頁の資料がございますでしょうか。それでは、深沢先生、勝田先生、よろしくお願いいたします。

勝田：ええ、よろしくお願いいたします。今渡邊（司会）さんから結婚式の司会みたいなスタートがありましたけど、私はまあ、勉強させていただく機会として、対談のお話がありました時に、引き受けることにしました。私はクリオのインタビューの愛読者なんですけれども、ついに自分が読む側じゃなくて、読ませる側の一人になったというのは、ちょっと驚きです。今日の対談の趣旨については、深沢先生の方から言っていた方が...

深沢：そうですね。まずクリオの編集委員のみなさん、それから関係する院生のみなさん、今日の準備をしてくださってありがとうございました。

そこで、今日の対談の趣旨なのですが、昨年と一昨年におやめになった先生方の場合には、「定年退職教員」のインタビューという形をとりましたが、わたくしの場合はいろいろな理由からそれを望まない。退職者のモノログよりは、むしろ現役教員とのダイアログであるほうが、学問的には有益だろうと考えて、今回はそろそろ退職するわたくしと、就任されてまだ年月の浅い新任の勝田先生とのあいだで、世代を超えて歴史学を語るという場を設定したいと思い、それで勝田先生にお願いしました。

そういう対話を通じて、生産的な討論を行いたいというのが、今日この形で対談を設定させていただくことにした理由でございます。それで現在なぜわたくしが勝田さんに対談の相手をお願いしたか、という理由をあらかじめご説明しておいたほうがいいかなと思います。現在、同じ西洋史学研究室にいらっしゃる先生方とはいろんな形でお付き合いがありますけれども、その中では勝田さんが、おそらく一番わたくしとお付き合いが長いし、また深いのではないかと思います。

具体的に言いますと、わたくしと勝田さんとの学問上の協力はすでに 2000 年にはじまっており、この時に移民史のシンポジウムを、史学会の例会の試みとして行ったことがあります。それはわたくしの業績表にも載せてありますけれども、2000 年の 6 月 24

日、史料編纂所の大会議室で、史学会の例会シンポジウム「ヨーロッパ移民の社会史 17～20 世紀 エスニシティの形成と軋轢をめぐって」をやりました。このタイトルはわたくしが考えたものですが、この時に勝田さんにご協力いただいたのが、御一緒の仕事始めだったと思います。

そのあと翌年 2001 年から 2003 年にかけて、科学研究費プロジェクト基盤研究 B-2 の枠で「ヨーロッパにおける宗教的寛容と不寛容の生成・展開に関する比較史的研究」を組織し、わたくしが研究代表者、勝田さんには研究分担者になっていただきました。

これが終わって二年後、今度は 2005 年から 2007 年にかけて新しい科研を、わたくしがやはり代表者になって組織しました。これは「ヨーロッパにおける宗教的・密儀的な団体・結社に関する比較社会史的研究」というテーマのもとで、勝田さんに同じく研究分担者になっていただきました。

それが終わると三度目の正直で、二年後に始まる「ヨーロッパ・地中海世界における異宗教・異宗派間の相剋と融和をめぐる比較史研究」のプロジェクトに着手し、今回は科研 A のやや大きなプロジェクトで、2009 年から 2012 年の四年間にわたり続けました。この三つの科研のすべてで勝田さんに研究分担者になっていただき、御一緒に何度も研究会を開き、そのつど本を出版してまいりました。それが今日もってまいりました書物で、最初の科研の成果は『信仰と他者』、二度目の科研の成果は『友愛と秘密のヨーロッパ社会文化史』という書物にして出版しました。三つ目の科研の成果は現在編集集中で、これにはすべて英文で原稿を提出していただき、ヨーロッパの出版社、おそらくイギリスになるかと思いますが、わたくしを編者とする共著にして出版する予定です。

というわけで、勝田さんとはもう足かけ 15 年くらい協力関係にあり、しかも非常に密接なお付き合いがありますので、お互いに学問的にも人間的にも気心が知れている間柄ですから、こういうお話を気楽に、しかもお互いにとって有益なしかたでお話するには最適な相手であると思い、お願いしたというのが経緯です。

ですから勝田さんとは、いろいろな意味で研究領域がかかわり、交わっているとわたくしは考えていて、もしかしたら誤解かもしれませんが、ともあれそういう気持ちでお付き合いしてまいりました。

ですから、この先にお話を進める前に、いくつもの共同研究や、プロジェクトを御一緒してきて、勝田さんがどのようなご感想をおもちか、どんな意見や、また現時点でどのように御自身の研究とのかかわりをお考えになっていられるか、あらかじめ勝田さんからお話を伺えたらと思っております。

勝田：はい。そうでした。『クリオ』のコンテキストでいうと、インタビューだけじゃなくて対談というのも何回か行われています。深沢先生も羽田先生となさっていますし、それから城戸先生と遅塚先生の対談もありますし、近藤先生と岸本先生のもの、高山・池上両先生のものもありますけれど、今回の対談は、共同研究をたくさんやらせていただいているということと、もう一つある程度年齢の違いがある、新米とベテランの先生ということで、ややユニークな試みですね。

それで、いま、おっしゃっていただいたように、先生には何度も研究仲間に入れていただいたんですが、そうですね、荒っぽい分類かもしれないんですが、深沢先生のお仕事には、国際商業のお仕事があり、宗教社会史、宗教史のお仕事があり、港町のお仕事

もあり、それからフリーメイソンのお仕事もあります。そうしたなかで、残念ながら私は国際商業と港町ではご一緒する機会がなかったんですけども、宗教の方とフリーメイソンの方でご一緒させていただいたということになると思います。ただ、その先生のお仕事は、いま四つに無理矢理分けましたけれど、分断されているわけではないし、それから、国際商業、港町研究から派生した研究にディアスポラ研究がございます。その一環で史学会の例会に声をかけていただいたのが、初めてでした。で、その時わたくしは当時でいう助手でしたし、今でも最後の科研にお付き合いしたことで、要するにお給料もらうようになってから大体ずっと深沢先生の科研で研究費をいただてきました。深沢先生の科研では、こういう形で研究会をやって、大体一年に二回くらいという感じでしたよね。そして、すべて深沢先生が研究リーダーなんですけど、いろんな分野の人に声をおかけになって、ご自分の研究報告に加えて、他の方々の研究を総括なさる、というお役目でした。そして研究会のあとは大体においてワインをいただく会に移行して議論が続くという、今日も同じ形になるようですが、そうしたやり方になっているようです。

そうですね、あの、やっぱり、一緒にやらせていただいて、すべて有益だったんですけど、最初の移民史の例会の時に感じたこととして、メンバーの選び方が面白いんですよ。要するにアイルランドとイタリアと、それから南アフリカという、言ってみればヨーロッパ史研究においてはマイノリティに属するところに声をおかけになっている。それは、深沢先生のそのあとの共同研究にもかなり色濃く出ていると思うんですけども、やっぱり周縁的なところに目配りをなさっていて、そして、研究会なんかでも実によく、まあ、マイナーな分野も含めた皆さんのお話をお聞きになっているんですね。いわばこう、異端的とまではいかないかもしれないけれど、マイノリティを研究対象としている人の、そういう研究を拾い上げて、共同の成果にするんだという、そういう姿勢をすでに史学会例会の時に私は感じていました。

あとはそうですね、あの研究会でやらせていただいたことは、自分のアイルランド史研究にとって、こんな意味を持ったんですね。あの時までには私は百姓一揆のことしか知らなかった人間です。それがいきなりドイツから来た移民の話をやりたいですと言いましたら、いいよといってくださいって、じゃあということでやらせていただいたんですけど、まあ、17世紀から19世紀くらいまでのタイムスパンで考えて、それも、地理的にはドイツからアメリカまでを考えるとというので、自分にとっては勉強になるとてもいい機会だったんですけど、それ以上のことがありました。というのは、基本的に日本のアイルランド史研究というのは、一種の所謂イギリス史に対するルサンチマンとしての性格が強かったと思うんですね。要するに成功例としてのイギリスというのがあって、それに対して、こんなにうまくいった国がある一方でこんなに苦しんでいた人たちがいるんだよ、というのを告発するのが存在意義だったのかもしれない。でも、それとはまったくちがう形で議論を立てて、そういうペーパーを読むというのも、研究として成立するんだな、というのがはっきり分かった。それが一番大きかったような気がします。

これ、全部言いますか？ こういう感じで、先生。これはなかなか大変ですね。

深沢：いまはあらましかけお話いただき、あとからお互いに自由にいろいろ述べることも出てくると思います。

勝田：そうですね。では手短に行きますと、『信仰と他者』と、今やっている、一番最後になっちゃった科研ですね。今のところ。

深沢：『相剋と融和』ですね。

勝田：はい。その科研でいいますと、アイルランドの歴史は、先ほども言いましたように、失敗例の歴史なんですね。私もそういう側面ばかり、こううまくいかない、うまくいかなかった、イギリスだけの責任ではなくって、ほかの理由もあってうまくいかなかったというのを言いがちなんですね。だから、宗教的寛容というのを言われても、いや、アイルランドには宗教的寛容はなかったんですよ、という形の結論になりがちです。実は『信仰と他者』で私が書かせていただいたのもそういう話だったんですけど、それからあと、『友愛と秘密』を経て、新しい科研でもお付き合いしているうちに、どうもそればかり探すべきではないし、アイルランドの歴史も失敗例ではなかった側面があるんだな、ということにはっきり気が付いてきたことも、とても大きいのです。

それで、先ほど先生が英語の本とおっしゃいましたけど、実は私はまだ自分の原稿を出してないのです。ですからあまり大きなことは言えないんですけど（笑）、この科研の研究テーマを当初とは大きく変えまして、むしろ、共存共栄が可能な空間が存在していたんだ、というのを正面から出したペーパーにしようと思います。こうしたところに気が付いていったのは、深沢先生の科研をご一緒させていただいてからなんだ、と思います。ちょっと今はそれぐらいで。

深沢：そうですね、あとで勝田さんから御自身の研究と、そこにある問題のパースペクティブについて自由にお話を伺いたと思います。お話の順番としては、これから各人の専門分野と、関心の領域や方向性について、相違点と共通点を確認していくのがいいかなと思います。まずわたくしから、自分の研究と、勝田さんの御研究との間に共通する視点または視界の設定が、どんな次元にあるだろうかと考えてみましたので、それをはじめにお話し、そこからふたたび勝田さんのお話を伺ってまいりたいと思うのですが、もしわたくしの理解が正しいとすれば、わたくしはフランス史専攻ですが、実際にはそのなかで南フランスを拠点にしています。ですから仮に南フランス史家と自己定義してみますと、その南フランスとアイルランドとは、いろんな意味で有効な比較の座標軸を提供してくれるように思います。

つまり南フランスとアイルランドは、それぞれがフランス史とブリテン史に対して占める政治的・社会的・経済的・文化的、および宗教的な位置において、ある種の共通性、または少なくとも類似性を認めることができるのではないかと。それは初めに司会者の方もおっしゃったように、一言でいえば「周縁性」の視点と申し上げてよろしいかと思います。その周縁性の視点を通じて、いわば「中心史観」と呼ばれるものを相対化し、さらには価値判断の転換を行う。そこにおそらく重要なポイントがあるのではないかと考えています。そこで、それをいくつかの次元に分けてお話をしたいのですが、わたくしが思いつく範囲では四つの周縁性を考えることができると思います。

第一は政治的周縁性です。もちろんアイルランドの場合は、イングランド王国に常に従属させられ、連合王国の体裁をとった場合でもロンドンとウェストミンスターに対する従属関係を背負いながら歴史を形成してきた。

南フランスはといえば、アイルランドとは異なるけれども、かなり類似した文脈を考

えることができます。かつてプロヴァンス地方は神聖ローマ帝国に臣属し、中世にはブルグンド王国、または南ブルグンド王国の一部を構成し、そのあとはフランス王権には直接の臣属関係のないプロヴァンス伯領として成立します。それが 13 世紀中葉にアンジュ家、ルイ 9 世聖王の弟であるアンジュ伯シャルルの伯権下に入り、最終的に 15 世紀末、1481 年にフランス王国に併合されるわけですね。しかしその後もプロヴァンスは、多かれ少なかれフランス王国に対する距離感を保ち続けます。フランス革命のときにも、決してパリの中央集権、ジャコバン政権に対して忠実な地方だったわけではない。その意味で、やはりある種の政治的周縁性をもち、それが第三共和政まで続きます。ですから一定の政治的アナロジーをそこに想定することができる。これが第一の視点です。

第二に経済的周縁性、これは括弧つきで「経済的後進性」と呼ばれるものです。アイルランドについては、勝田さんにお尋ねしたほうがよろしいのですが、南フランスについていえば、日本の戦後史学・社会経済史学では長らく「中南部後進地帯」の形容詞で表現されてきました。わたくしの前任者である遅塚忠躬先生なども南フランスは後進地帯だと心底から思っていたらしいでしたね。そういう地帯とみなされて、北フランス、あるいはもう少し広くイギリスを含む北西ヨーロッパ地域、いち早く近代資本主義と産業革命を実現した地域と比較され、南フランスは工業化に挫折した後進地帯というレッテルを張られ続けました。アイルランドについても、伝統的な麻織物工業などがありましたけれども、最終的には同じような農村社会、工業化挫折の後進社会だと理解されてきましたから、経済的な次元での照応関係をこの二つの地域に考えることができる、これが二番目です。

第三は宗教的特性です。これはもう少し広くとれば、ヨーロッパ近世・近代史を、宗教改革以降のプロテスタンティズムにより近代市民社会と近代資本主義が形成される過程とみなす立場から生じます。アイルランドでカトリック信徒が大多数を占めるように、フランスもカトリックの国ですが、その中でも南フランスのプロヴァンス地方は、ブルターニュ地方などと並んでカトリック勢力の強い地域とみなされてきました。そういう意味でも南フランスは後進地帯、地中海沿岸の保守的カトリック世界の一部とみなされる傾向がある。

ただしこの宗教事情に関しては、若干の補足を加える必要があります。この点でアイルランドとの類似関係を考えられるかと思いますので、後で勝田さんに確認していただきますが、アイルランドの場合は 5 世紀のあいだに聖パトリックなどの活動により、キリスト教化が進展し確立したといわれますね。ところで南フランス、特にその中心都市であるマルセイユにキリスト教が浸透し、初めて東方の修道制が導入されたのも同時期の 5 世紀前半で、それは聖カッシアヌスという人が、ルーマニア方面から来住して、初めてマッサリア、すなわちマルセイユに修道制を導入し、サン＝ヴィクトル修道院を創設した時にさかのぼります。ですからプロヴァンス地方はキリスト教化、またはカトリック化がガリアで一番早く開始された地域です。そういう起源と歴史的経緯からみて、アイルランドと南フランスとの間にある種の並行関係を見出すことができるかもしれない。これが最初の補足です。

もうひとつの補足は、ご承知の通りアイルランドでは、イングランド人による支配が強化されるにつれて、プロテスタント少数派が増加し、少数のプロテスタント支配層と

大多数のカトリック信徒たちとの摩擦の歴史が形成されますが、南フランスはどうかといえば、ちょうど鏡に映して逆さまにしたような構図が存在します。

確かにプロヴァンスはカトリック勢力の強い地域、のちにはやや過激なカトリック兄弟団である悔悛苦行兄弟団が活動を広げた地域であり、宗教戦争期にはリーグ派と呼ばれる過激カトリック勢力が優越した地域です。でも同時に、地中海沿岸の南フランスは、フランスにおけるプロテスタンティズムの最大拠点でもあります。もっともこれはプロヴァンス地方というよりローヌ川西岸のラングドック地方ですが、地理的には近接しており、しかもローヌ川を少しさかのぼれば、その東岸、つまりプロヴァンス側にもプロテスタント勢力の強い地域が点在しています。その中でとくに重要なのは、教養学部の西川杉子さんが研究されているヴァルド派で、これは 13 世紀の教皇令により断罪されて各地に離散したのち、15 世紀後半にはプロヴァンス地方に拠点を築きます。そのヴァルド派がやがて宗教改革に合流し、カルヴァン派の影響を強く受けるようになった時期、フランソワ 1 世の時代に、ヴァルド派の大量虐殺がおこりました。ですから激しい宗教対立の舞台になった点でも、南フランスとアイルランドにはある種の共通性を認めることができる。これが二番目の補足です。

以上が第三の要素ですが、第四の要素として、やはり言語的・文化的な周縁性をあげることができます。ご承知の通り、アイルランドは所謂ゲール語の世界であり、アングロ＝サクソンの英語は後から導入された言語ですね。同じように南フランスの場合は、もともとオック語の世界であり、それがのちにフランス王国に統合されるにつれて、北部のオイル語、すなわちフランス語が優位を占め、しだいに本来の土着言語が排除されていくプロセスをたどる。この点でも両者は似通っていると考えられます。

ですから、おおよそ以上の四つの要素を考えると、南フランスとアイルランドの視点、先ほど勝田さんも言われた周縁的世界の視点から、ヨーロッパ史あるいはブリテン史またはフランス史のそれぞれをとらえなおし、批判的に再検討する視点を共有できるのかもしれない、という風にわたくしは考えています。

以上がわたくしの立てた大まかな見通しなのですが、勝田さんいかがでしょうか。

勝田：まったくおっしゃる通りだと思うんですが、先生、二点ほどご質問させていただいてよろしいでしょうか。

深沢：どうぞ。

勝田：すべておっしゃったような共通性があるなと思うんですけど、やっぱり違いも言いたくなってしまうところもあります¹。それはやはり南フランスは地中海というあの世界に属しているということですね。アイルランドは北海世界というところで、なんていうんでしょうか、要するにアイルランドは決してアジアとは関係をもつような場所ではないけれど、南フランスは先生のあのレヴァント貿易のご研究にありますように、あちらと接触している世界であるということをどのように考えるのかな、アジアだけで

¹ 勝田註（後日）。対談の際には言えなかったことですが、アイルランドとフランスの歴史学界では、両国を直接比較検討する共同研究が過去 30 年以上も続いています。ただこれは、あまりにも違う二つの国を比較したためであってか、必ずしも無条件の成功とは言えないようにも見えます。むしろ、深沢先生のご指摘のように、南仏とアイルランドを比較の方が有効なのではないかと思います。



はないでしょうけど、地中海世界だったということ、北海世界だったということはどうもちがうものだったという気がするんですね。それはどうでしょうか。

深沢：もちろん広い意味での文化圏または文明圏への所属という点を考えれば、両者は根本的にちがう。これは当然のことだと思います。ですから相違点としては大

事な御指摘だと思いますが、北西ヨーロッパにおける領域国家の形成、そして近世における中央集権国家の形成とその中で置かれた地位、政治的・経済的・社会文化的な位置という点では一定の類似性を認めていいのかなと。

逆にお尋ねしたいのですが、アイルランドの場合、北海文化圏の中に入れてよろしいのでしょうか。わたくしの眼から見ると、アイルランドとイングランドのコーンウォールあたりは、フランスのブルターニュ半島と近い関係にあり、この辺は北海世界とは少し別の世界なのかなと想像していましたが。

勝田：うーん、近世以降になるとその感覚はどうもアイルランド史の方では薄れていくのではないのでしょうか。やっぱり...ブルターニュからの継続性、そうですね、たとえば先生、ゲールの文化圏であることは事実ですけど、アイルランドのノルマン・コンクウェストってイングランドから百年遅れて行われるんですけど、だから、遅れてきたノルマン・コンクウェストなんですよ。そのあとにも人間が、ブリテン島から続々と入ってきたところです。これもまた、史学会の例会で気づいたことなんですけど、やっぱりあそこは、19世紀に入って突然人を送り出し始めるまでは延々と植民・移民の様々な波を吸収してきたところなんですね。とすると、...どうでしょう、もちろんヴァイキングも来るといことも合わせまして、いくつもの層が重なってできた文化のような気がするんですね、アイルランドというのは。それを考えると、どうでしょうね、ブルターニュとの継続性はあるんですけど、どんどん目立たなくなっていったような気がするんです。

深沢：住民の形成や、それに伴う文化的個性の成立という視点からみれば、もちろん多様な要素の影響があり、複合的な形成物だというのは御指摘の通りだと思いますが、わたくしのように内陸の側よりもむしろ海岸の側から世界を見る立場から考えると、やはりあの辺は海を通じて相互関係をもつ世界かなという気はいたします。そのあたりはどうでしょうか。非歴史学的なものの言い方で恐縮ですが、リヒャルト・ワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』は、アイルランドからはじまり、コーンウォールを経て、最後はブルターニュで終わる物語ですね。ですから私の先入観かもしれませんが、海を挟んで向

かい合う世界の間に、一定の共感関係といいますか、交通・交易・交渉により結ばれた共通の空間、歴史的空間のようなものがあつたのかな、と想像していたのですが。

勝田：これも想像なんですけど、海があるというのは境界線ではなくむしろつながっているという感覚を生み出すものなんだというのは私もわかるつもりです。ただ、アイルランドの場合はそれはむしろイングランド・スコットランドとの結びつきを強化する方向に機能していったという印象が強いですね。

それとワーグナーの、先生のご本で学びましたけれど、どうでしょう、これは 19 世紀のロマン主義の、あるケルト的なつながりを強調するイメージの産物という可能性はないですか。ケルトの復興の時期の。

深沢：なるほど。あとはいかがでしょうか。

勝田：もう一つ、確かに南フランスとアイルランドは周縁性という点において共通性が強い。そこに注目することで、既存の歴史学に対する修正になるんだ、というところ、わかるつもりですけど、そこで核心に入りますけど、「どう」既存の歴史学に、ですよ。パリ中心史観、ですよ。ブリテン諸島であつたら、ロンドン、マンチェスター中心史観に、アイルランドを対峙させるというので、どういう戦略があるのかということですけど、これは後回しの方がいいでしょうかね。今話してしまっても？

深沢：もしお考えがあれば。

勝田：これは実は先生のお話を聞きながら考えようと思ってきたことですけど、アイルランドの場合は先ほども言ったようにルサンチマンに陥らない形で議論をするというのが大前提ですね。そのあとは、ヨーロッパ史の中で、大西洋にかなり開けた、ヨーロッパの一番西にある国だということに注目するやり方があると思います。近世のブリテン諸島から大量の人間が新大陸に出ていき、北大西洋世界を作るのと同じ時期にアイルランドも植民され、社会が作りかえられていったということです。でもまあほかにもたくさんあるんですけど。たとえば先生の場合ですと、フランス革命というのを、実は海港に注目することによって全く別の解釈ができるんだ、というのをおっしゃっていますよね。それも一つですよ。

深沢：ですから一般論として、周縁の側に視座を据えたから、ただちに批判的な研究戦略が立てられる、という風に歴史認識の修正が進むわけではないと思います。そういう周縁的位置に視座を設定し、そこから見えてくるものを既存の歴史記述の枠内に還元せず、それ自体を意味あるものとして構築することにより、おのずから相対化の手段が生成してくると考えればいいのだと思います。

わたくしは現在、マルセイユについての著書を執筆中で、それは古代ギリシアから現代までを視野に収めた書物になる予定ですが、そこでわたくしが論じようとしているのは、マルセイユの通史そのものではなく、古代にさかのぼるマルセイユの悠久の歴史が、19 世紀以降のマルセイユの人々によりどのように解釈され、読み替えられていくかという問題です。いま勝田さんがアイルランド人のルサンチマンについて語られましたが、わたくしはこの著書を執筆しながら、マルセイユの人々がパリの中央政府に対して強烈なルサンチマンを抱いているのを感じました。その感情は、少なくとも第三共和政期まで歴史家を含む知識人の間に受け継がれ、隠然たる形では現在も続いていると思います。おそらくイングランドとアイルランドの関係についても同じことが言えるかと思いま

すが、現在でも生粋のパリジャン、または広く北フランスの人々の間には、南フランス、特にマルセイユに対する隠れた蔑視があるようです。普段は隠れていますが、皆さんもご想像がつくように、インターネットのツイッターなどで露骨な言辞となって出てくる場合があります。わたくしはこの一年間にそういう事例をいくつか見ました。こういう歴史はパリだけを研究している人にはわからないものです。イギリスでもイギリス史だけを研究する人にはわからない。我々はそれに対してちがう目もちうる、それだけでも十分に意味があると考えています。

勝田：マルセイユに対する蔑視はどんな形で出てくるんですか。

深沢：そうですね、これはいま書いている本のなかでも引用しましたが、わたくしがフランスに留学してすぐのころ、パリの新聞にマルセイユ関連の記事が出ていました。マルセイユで麻薬取引の調査をしていた弁護士が、市内中心にある事務所で、白昼に射殺されたという事件です。そういう事件はマルセイユではよくありますが、その時パリの新聞は「マルセイユはフランスではない」とか、「フランスがあり、コルシカがあり、マルセイユがある」、つまりコルシカとマルセイユはフランスではない、と書きたてるわけですね。その意識の背後にあるのは何なのか、もちろんイデオロギーを支える根拠は単一でなく、また時代とともに変化するので簡単には定義できないのですが、ともあれ北フランスの人々の間に、南フランス、なかでも訛りの強い方言を話すマルセイユ住民を「他者」とみなす意識構造が、長期にわたり存在している事実を示すのだらうと思います。

勝田：『海港と文明』でお書きになっていたことで、よく覚えていることがあるんですが、イングランドとフランスの、どちらも中央・周縁の構造をもっていますけれど、そこには本質的な違いがあるんだっておっしゃっていますよね。イングランドは本当の意味で一極集中型、ロンドン集中であって、フランスは確かに地方と中心で格差はあるけれど、地方にもそれぞれ重心がある。それらが個別な形でパリと喧嘩しているので、地方の間の連帯が存在しえなかった、という構図があります。

マルセイユも、パリに対するルサンチマン意識があったと同時に、ほかの海港とはちがう、という独自意識があった、ということですよ。

深沢：それは非常に強かったと思います。これまでに出版した本でも書きましたし、現在執筆中の本でも触れると思いますが、マルセイユの場合、自分の都市特権を守ることに強く執着し、そのためにボルドーやナント、またはラングドック地方のセットなど、競合する商業都市と港町を排除する伝統的戦略があります。ですから王国商務顧問会議という審議機関が 18 世紀に創設されますが、その場でもマルセイユとほかの商業都市との間に争いが絶えない。他の諸都市はマルセイユの特権を攻撃し、マルセイユは自らの特権を守ろうとする、という構図がありました。

勝田：先生が南フランスとの類比でアイルランドは比較対象とするに足る、とおっしゃいました。それでアイルランド史及びアイルランド史研究者に興味をもつて下さったという風に理解しますが、そのほかにもジャコバイトとして、アイルランド商人の活動自体も、先生の関心をお惹きになっていますよね。要するにこれも、マイノリティに対する目配りということだと思っているんですけれども、所謂近世の主権国家ができ



る過程というのは、やっぱりこう、宗教改革以降の宗教的統合の過程と一緒に起こっている。だから必然的に宗教的弱者が外に出される作用があって、彼らは国民統合から排除された集団なんだけれど、それが商人だったり、ディアスポラだったりという形で存在している。国際商業なんてまさに彼らが活躍した場だったわけですし、そういった人たちにも目を向ける必要があるんだという

ように理解するんですけど、どうでしょう、フランス史の方から見て、ジャコバイト商人の活動は、アルメニア商人とは別な意味でやっぱり大きいと考えていいわけですね。

深沢：近世フランスの枠組みで考えれば、実はアルメニア人はさほど流入していない。アルメニア人の活動拠点は、ウクライナのリヴィウ（ルヴフ、リヴォフ）、イタリアのリヴォルノ、そしてアムステルダム。おそらくこの三つが最大の拠点で、あとはイタリア全域と中央ヨーロッパ、バルト海沿岸まで活動の幅を広げています。もちろんオスマン帝国からサファヴィー朝イラン、ムガル帝国まで活動のネットワークをもっていましたから、ユーラシア貿易の視点から見れば、たいへん大きな存在ですけど、当時のフランスに関していえば、それほどアルメニア人の活動は目立っていません。

そのひとつの理由は、マルセイユでも、リシュリュの時代の優遇策により一時的に移住が増加し、比較的大規模なコミュニティもできたといわれますが、そのあとマルセイユ商業会議所と市政府とがマルセイユ商人との競合を恐れて排除したので、最終的にアルメニア人はマルセイユにあまり定着しませんでした。それに対してアイルランド系移民、とりわけジャコバイトと呼ばれ、名誉革命とアウクスブルク同盟戦争以後にフランスに移住した人々、フランスだけでなくスペインや南ネーデルラントにも流入しますが、彼らの活動は文化的にも経済的にも非常に重要です。

彼らがマルセイユにどのくらい入ってきたか、残念ながらあまりよく分からないのですが、おそらく一番重要なのは大西洋沿岸の港町、もちろんそれからパリ西方にあるサン＝ジェルマン・アン＝レ、ジェイムズ二世の亡命宮廷の周辺です。港町ではサン＝マロ、ナント、ラ・ロシェル、のちにはボルドーにもっとも多くの人が定着し、そこからカリブ海植民地へと移住した例もあります。彼らは実業家として重要なだけでなく、ルイ14世の時代には王国陸軍にも加わり、軍事的機能も果たしていました。

ただし戦争が終わると、軍人の多くは解雇され、大陸の別の諸国へ離散して各地で傭兵になります。しかし現在フランス留学中の見瀬悠さんが研究されたように、フランスに亡命したジャコバイト、または移住したカトリック信徒のアイルランド人、そこには多くの貴族が含まれますが、彼らの一部はフランスに帰化し、帰化認可状を受け取ってフランス社会にやがて統合されていくプロセスをたどります。

ですからフランスとアイルランドとの結びつきという観点から見れば、むしろ大西洋沿

岸の方が中心になりますが、そういう視点での連関をも考えることができるのは、おっしゃる通りだろうと思います。わたくしの現在の関心から補足すれば、フランスにフリーメイソン団の組織を最初に導入したのは、おそらくジャコバイト、それもジェイムズ二世と関係の深い貴族たちだったといわれます。フリーメイソン団が18世紀、「啓蒙の世紀」における重要な社会文化現象であったことを考慮すれば、この人たちがフランスに及ぼした影響はきわめて大きかったと思います。

勝田：また亡命ユグノもフリーメイソンの、あれはブリテン諸島の方ですよ。

深沢：そうですね。

勝田：ですからあれもディアスポラ現象と密接に結びついている。

深沢：まさにその通りだと思います。イギリスで『フリーメイソン憲章』と呼ばれる文書を作成した中心人物は二人います。一人はジェイムズ・アンダーソンという人で、この人はスコットランド出身の長老派教会牧師です。もう一人はジャン＝テオフィル・デザギュリエという人物で、こちらはラ・ロシェル出身のプロテスタント、亡命ユグノの家系です。彼は幼少のころに移住し、イギリスに移住したのちオクスフォード大学で神学を修め、国教会牧師になります。いわば改宗しているのです。同時に、王立協会のメンバーにもなり、アイザック・ニュートンの片腕として物理学の実験をした人、さらにフリーメイソンのグランド・ロッジ（ロンドン大会所）にはいり、その最高指導者になります。おそらく彼の勧誘により、ロイヤル・ソサエティ（王立協会）の知的エリートやロンドン貴族層の多くがフリーメイソン団に加入したと言われます。そのほかにも一度ロンドンに亡命し、そのあともう一度大陸に戻り、たとえばフランクフルト・アム・マインなど各地でフリーメイソン思想の普及につとめた人々の中に、亡命ユグノが多く含まれます。ですから勝田さんのおっしゃるように、実は初期フリーメイソンの組織は、ジャコバイトやユグノの亡命ディアスポラと密接に結びついていました。

勝田：やっぱり今のお話を伺ってますと、私なんかは、深沢先生はそういう「外れていた」集団の重要性を掘り起こして来られた方だと思うんですけど、それと同時に、先生のご本もそれから今日のお話でも明らかだと思うんですけど、ものすごく地理的に、守備範囲がお広いんですね。少し柔らかな話になりますけど、以前深沢先生が雑談の中でお話になっていたことで、「この問題に関して自分は専門外なので」ということを言わないようにしているんだ、それがモットーなんだとおっしゃったことがあるんです。私もこれを真似しようと思うんですけど、なかなかできない。共同研究でもそうですが、そもそも先生の最初のご研究が、留学されてからあとですけれど、地中海世界ですからね。ヨーロッパ史の枠に収まらないところでお仕事なさるわけです。要するにレンジの広さですね。これは驚異的だなと、常に思っていることです。これは共同研究で私と同じように一緒にやらせていただいていた、千葉敏之君なんかも言っていることですけれど。

深沢：専門外であることを言い訳にしないよう努めていますが、もちろん自分にカバーできる範囲に限界があることはわかっています。しかしそのことと、自分が関心を持ち、解決すべき問題があるとわかった時に、それは自分の専門外だという口実を設けて、そこから逃げ出すことはしない。それが、モットーだという意味なのですけれど。

いかがでしょうか、この辺で両人の研究経歴を述べておくと、なぜそういう方向へ関

心がいったかの理由も皆さんに理解していただけるかと思うのですが。まず勝田さんから先にお話しいただいてもいいでしょうか。つまりなぜアイルランド史に関心をもたれ、そこから当時の歴史学の状況をふまえて、御自分のテーマや針路をどのように設定してこられたか、そして今どういう領域に関心があるかを、これまで勝田さんからまとめてお話を伺う機会がなかったので、お尋ねしたいなと思っていました。

勝田：お話するほどのこともないんですけども、実はアイルランドに目を向けたのは、修士論文を書いている行き詰っちゃったときなんです。卒論と、最初に考えていた修士論文は、今とはあまり関係のないことでして、軍事史をやろうと考えていたんですけど。

深沢：それはやはりアイルランドの。

勝田：いえ、卒論は 20 世紀太平洋の軍縮問題だったんです。まるでちがうものです。それで行き詰りまして、今度は修士論文では、19 世紀のグレート・ブリテンでカードウェルという人が軍制改革をやりますよね、修論でそれをやろうとしてまたしても行き詰って、ディアスポラになりかけた時がありました。この人いつ大学院やめるんだろなんと言われていたんですけど、どうもグレート・ブリテンが解決できない問題としてアイルランド問題というのがあるらしい、というのに気づいたのが発端なんです。これ、実は日本でアイルランド近代史をやる人間にとって割と一般的なルートだと思います。最初はイギリス史から入って、それで難問としてアイルランド問題があるんだ、というのでとりかかりやすいんですね。弱者アイルランドの立場にたって、コミットメントを強く感じることでできるものですから。

あとはじゃあ具体的にアイルランド史の中で何をやるんだというときに、これは近藤和彦先生のご研究の影響がありまして、「民衆」が面白いということで民衆運動に注目して、修士論文ではカトリック解放運動というのを取り上げました。そのあとは、もっと民衆の世界に入り込もうということで、百姓一揆に関心が向かいました。留学中は、後の深沢先生との共同研究にもかかわる一揆勢の秘密結社の世界を勉強して帰ってきた、そういう経緯です。そのあと、深沢先生に誘っていただいて、先述のように移民を切り口にしてアイルランド社会をそれなりに理解して、あとは科研のプロジェクトの『信仰と他者』のところでダブリンをやらせていただいたのも大きかったですね。あれで都市史の方にも自分なりの関心を広げることができました。

深沢：ダブリンでは、トリニティ・カレッジに留学されたわけですね。

勝田：はい。

深沢：それで指導教授はカレン先生、わたくしの友人でもある先生ですが²。

勝田：これもやっぱりご縁なんですけど、カレン先生という方はフランス史にかなり造詣の深い方ですね。私はそれぐらいで。

深沢：そうですか。ところでカトリック解放運動は 19 世紀の初頭・前半の現象でしたね。

勝田：はい、1820 年代にダニエル・オコンネルというカリスマ的リーダーが登場してきて、合法的民衆運動を組織したんですね。

² L. M. Cullen、ダブリン大学トリニティ・カレッジ近代アイルランド史名誉教授。

深沢：なるほど。そうすると御専門の時代は、修士論文のころから現在まで一貫している理解してよろしいですか。

勝田：そうですね。はい...一番自分で史料の土地勘があるのが 19 世紀前半です。

深沢：カレン先生はトリニティ・カレッジの先生ですが、あの大学は面白いところだと思います。トリニティ・カレッジは 16 世紀末、エリザベス一世の時代に創立されますが、その後長らくプロテスタントの男性でなければ入学できなかった。たしかカトリック信徒でも入学が認められるようになったのは 18 世紀末ごろで、しかも 1970 年くらいまではカトリック聖職者の側で信徒がトリニティ・カレッジに入学することを許可しなかった。そういう機関ですね。だからわたくしが読んだフランス語の書物では、トリニティ・カレッジは長らくアイルランドの海原に浮かぶプロテスタントの孤島のようなものだった、と書かれています。その中でカレン先生はカトリック信徒でしたから、非常に例外的な存在だったというお話を聞いたことがあります。勝田さんがアイルランドに留学され、そのトリニティ・カレッジで勉強された体験から、どんなことをお考えになったか、一度お尋ねしたいと思っていました。そのあたりのこと、何かお感じになりましたか。

勝田：実は、所謂実証研究のフィールドに放り込まれて苦しんだというのと、トリニティ・カレッジだったからどうだったのかというのは、自分の中では区別されていなかったんです。とにかくしんどい思いをしていたのは、手を汚しながら史料の山と格闘するということばかりでして、トリニティ・カレッジの経験がどうだったのかというのは実は私、当時なにも考えていなかったと思います。

それでカレン先生という方とはとてもリベラルな方でして、「君がこの史料をこう読んでこう解釈するんだったらそれでいいんじゃない」という、指導は大体それだけなんです。もちろん、どこにどういう史料があってそれはこういう性格のものだから、こういうバイアスがかかっている、ということまでは示唆してくださるんですが、それ以上のことはないんですね。ですからそうですね、その点でいうと文化的に貧しい留学生生活だった気がします。

深沢：そんなことはないと思いますが、なぜこんな質問をさせていただいたかという、勝田さんがかつてお書きになった『史学雑誌』の掲載論文、1998 年ですから 16 年前に公表されたものですが、読んで強い印象を受けた論文ですので、今回少し読み直してみました³。これを拝見すると、20 世紀前半におけるアイルランド史の学問的な確立は、アイルランド人の強烈な国民意識、それも反イングランドというコンテクストで形成された国民意識に裏打ちされたものであり、後の修正主義も、その文脈を現在の状況に即してどう読み替えるか、というところから生まれたという史学史的な総括をなさっていて、なるほどと思いましたが、その後の事情はどうだったのか。留学されたのは 1990 年代でしょうか。

勝田：はい、1995 年からです。

深沢：1995 年には、もうトリニティ・カレッジとその他の大学とを問わず、そういうイ

³ 勝田俊輔「『共同体の記憶』と『修正主義の歴史学』——新しいアイルランド史像の構築に向けて」『史学雑誌』107 編 9 号、1998 年、80-95 頁。

デオロギー的問題はさほど強く肌で感じられなかったと理解してよろしいでしょうか。

勝田：ちょうど消えかかったところだと思います。先ほどのことに少し補足しますと、オクスフォード、ケンブリッジにいった人たちは強烈な文化体験をして帰ってくるんですが、実証研究との出会い、というだけではなしにですね。そういった体験はアイルランドでははっきり言ってあまりありませんでした。

それで、今のご質問に戻りますと、実はその所謂修正主義論争ですね、我々のもっているナショナル・ヒストリーに即さない歴史を書くなんてのはおかしいんだ、歴史家連中というのは血の通わないサイエンティストであるというような批判の論法というのは、留学当時まだ生きていました。ただ、90年代のアイルランドは繁栄がはじまっていて、一時的には通貨が、その時はまだユーロに入っていなかったんですけど、イングランドのポンドよりも強くなったりしている時期だったこともあり、さらに北アイルランド紛争の解決のめども立っていたということもあるんでしょうけど、学界の内部ではそういう論争はもうなかったんです。とはいえ、文学者、それも19世紀のロマン主義的な傾向を受け継いで、こういうのがアイルランドのアイデンティティであり、それがアイルランド文化なんだといっている人たちと、歴史家たちとの間の論争はありました。

カレン先生は、もちろん単純なナショナルヒストリーは拒絶なさいますけれど、その一方で所謂リヴィジョニズムというのも好きではないんですね。北アイルランド紛争の負の経験があったからアイルランド史のストーリーをナショナリズムを相対化する方向に組み替えよう、というのは短絡的反応かもしれないよ、と言ってはっきり距離をおいていらっしゃったんです。ところがそのカレン先生が、ナショナリズムの側からはリヴィジョニストの親分の一人だって言われてしまっていた。それは現役の歴史家で、アカデミックな形で過去を再構成しようとする人たちの重鎮がカレン先生だったというせいもあるんですけど、そここのところにアイルランドの修正主義論争の特殊性があるのかなという気がします。要するにアカデミックな歴史家が一かたまりになって、「お前らリヴィジョニストだろ」といわれてしまうということですけど。

深沢：勝田さんから御自身の大学院時代からの研究経歴について伺いましたので、わたくしも少しお話しておくのがいいかなと思います。

勝田さんは卒業論文以来、初めはむしろブリテン史・イングランド史をなさっていて、そこから悩んだ末にアイルランド史に転向したのだと、ここで初めて伺いましたけれど、なるほどと思いました。

わたくしはやはり、若い時に卒業論文や修士論文を準備する段階で、テーマの選択に悩むのは当然のことであり、むしろまったく悩まずに、最初からきちんとレールを敷いている人の方がむしろ不安を感じるので、悩むのが当然であり、また必要な作業だろうと考えます。なぜかといえば、研究対象を選ぶ行為は、自分自身と、対象とする世界との間のどこに共感または共鳴の関係を見出すか、という人生に対する問いと同じことです。それなしに学問をする危うさの方がむしろ重大だろうと思いますね。そういう意味ではわたくしも、自分が悩んだことはすぐに忘れるのですが、その時はそれなりに悩んだのではないかと思いますので、その頃の話から、思い出すままにお話しします。

わたくしは大学院に入学したとき、フランス農業史を研究するつもりでした。そのきっかけはたいへん素朴なもので、その前に東地中海を中心にあちこち旅行する機会があ

って、そのときに見た農村風景がとても美しかった。美しいだけでなく、それぞれの国や地域によって農村景観が異なり、その異なる景観の中に、おそらくわたくしたちが文明と呼ぶものの基底的な構造があるように直観的に思い、歴史を考えるときにも、まず農村社会を調べることが大事ではないかと感じました。それで大学院に入った時点で農業史からはじめたいと思い、日本における西洋社会経済史研究を勉強してみたら、たしかに皆さんが農村史・農業史から出発していることもわかりましたので、それならぜひやってみたいと考えたわけです。

ただ勉強するにつれて疑問も生じました。わたくしが大学院に入ったのは 1970 年代前半で、まだいわゆる戦後歴史学、または大塚・高橋史学と呼ばれる社会経済史研究の構築した歴史観と歴史理論が支配的な時代でした。ところが自分なりにフランス語の文献を読んでみると、とりわけ大学院入学後に最初に読んだフランス語文献は、翻訳も出ているマルク・ブロック『フランス農村史の基本性格』でしたが、それをフランス語で読むうちに、それに多くを依拠しているはずの高橋幸八郎先生の著書『市民革命の構造』や『近代社会成立史論』とはなんと落差があるのだろう、と思いはじめました。その落差がいったいどこから来るのか、わたくし自身が本当に自分の眼で見たい世界は、たぶんマルク・ブロックの側にあるのではないかと考えました。それがおそらく、わたくしの経験した最初の葛藤だったろうと思います。そして最終的に自分の修士論文のテーマを決めようとしたとき、たまたま遅塚忠躬先生から、フランス農書のマイクロフィルムがあるので、読みたければ貸してあげるよ、とおっしゃっていただき、それが 19 世紀前半のアドリアン・ド・ガスパランの農書でした。あとで調べたら、この人の主著は東京大学農学部図書館に収められていることがわかり、その膨大な『農学講義』という書物を全部コピーして、いまでも保存していますけれど、ガスパランの農学体系を勉強することにより、自分の修士論文の道を見出したい、そして高橋幸八郎先生の本を読んだときに、どうしても納得できない部分があった葛藤を、自分なりに解決したいと思ったのが出発点でした。

ところでアドリアン・ド・ガスパランの著作を紐解いてみたら、彼は南フランスのローヌ川河岸の町オランジュの出身で、オランジュはもともとナッサウ家の所領であり、プロテスタントの牙城でもありました。そしてガスパラン家自身がプロテスタントの家系です。その先祖をたどると、16 世紀にジャン・カルヴァンのもとで執事を務めたジャン・ド・セールの家系にたどりつきます。ガスパラン自身もプロテスタントであり、19 世紀フランス最大の農学者、また七月王政期にモレ政府の内相を務めた人ですから、歴史的にも重要な人物ですが、彼の農書を読むうちにわかったことは、18 世紀以来イングランドから導入された農学理論を、彼が厳しく批判したことです。その農学理論とは、チャールズ・タウンゼンドやアーサー・ヤングなど、いわゆる四圍輪栽式農法、農業革命の基本理論とされたものです。それがフランスに導入されて、ことごとく失敗している。それに対して、各地域の現実に根差した農学を構想したのがガスパランでした。彼は地中海沿岸の南フランス出身ですから、南フランス農業の現実から出発し、それに根差した新しい農学体系と農業経済のあり方を構想したわけです。このガスパランから着想をえて書いたのが修士論文で、わたくしが南フランスを自分の研究フィールドに据えるきっかけになったのは、間違いなくこの人との出会いであり、またフランスにおける

宗教的少数派に関心をもちはじめたのも、このガスパランとの出会いがきっかけになりました。したがってこの時に、南フランスと宗教的少数派という現在に至るライトモチーフの少なくとも二つは見出したことになります。

ただ正直に言って、当時の日本の歴史学界、とりわけ土地制度史学会を中心とする西洋経済史研究の支配的傾向の中で、わたくしが見出したことを続けるのは非常に困難であることも、まもなく感じるようになりました。それはたとえて言えば、重い水圧のかかる海底で研究するようなもので、わたくしにはだんだん息苦しくなりましたので、博士課程に進んでフランスに留学したときには、なにか新しい活路を見出したいと考えていました。その結果たどり着いたのがマルセイユで、これはある意味で理の当然でもあり、南フランスでは慢性的に穀物生産が不足しますから、つねに外部地域から穀物を輸入しなければなりません、その穀物流通の十字路になったのがマルセイユであり、当時の南フランス経済全体がかなりの程度マルセイユ商業に依存している面がありましたので、南フランスに関心を定めた以上、やがてマルセイユに関心が集中するのは、論理的にみて当然の結果ということができます。こうしてフランスに留学してからは、マルセイユの都市制度と国際商業とに関心を集中させ、いくつかの紆余曲折を経て、最終的に 18 世紀マルセイユの地中海貿易を博士論文のテーマに選びました。研究対象とする時代も、約 1 世紀さかのぼったわけです。この時代のマルセイユ地中海貿易にはもちろんいくつかの部門がありますけれど、その中で伝統的に一番重要な部門はレヴァント貿易、すなわち東地中海域のオスマン帝国支配領域との交易ですから、それを研究対象に選びました。

ところがその中でとくに関心を惹いたのは、従来の日本の社会経済史ではとても関心対象になりそうもない、製造品の輸入貿易でした。というのは日本の正統的社会経済史にとって、関心があるのは産業資本の形成つまり工業化ですから、重要なのは原料を輸入し、製品を輸出することであり、それ以外の分野にはさほど関心をもちません。わたくしの場合はそれとは逆に、オスマン帝国で製造される繊維製品の輸入貿易を研究することになり、結果的にふたたび日本の経済史研究とは異なる領域に関心をもちました。したがって日本の経済史学界では理解されにくいテーマを選んでしまったと思います。

なぜ、そんなところに行きついたか、という経緯については長くなりますので、ここでは省略させていただきますけれども、そのテーマの研究をやってわかったことは、18 世紀のヨーロッパとアジア、または少なくともヨーロッパ諸国とオスマン帝国との関係において、必ずしも先進経済地域のヨーロッパが一方的に工業製品を輸出し、相対的に付加価値の低い農産物や原料を輸入して、それにより世界経済、アジア経済を支配したという図式は当てはまらないことです。ですから、ちょうどわたくしの留学する前後から、日本でもアメリカを中心とする海外の学界でも、イマニュエル・ウォラステインの世界システム論が受容され、利用されるようになりましたが、わたくしはこのウォラステイン流の世界システム論には最初から批判的にならざるをえませんでした。

その意味では経済史の支配的潮流に対して、再びマイナーな領域に自分を追い込んでしまった形でしたが、その代わりに得たものは大きかった。なぜならば工業製品輸出と原料輸入との視点からは、ヨーロッパのアジアに対する経済的支配という次元しか見えてこないわけですが、逆方向の輸入を考える、つまりアジアまたはオスマン帝国の文化

的産物である様々な製品その他の商品が、ヨーロッパに輸入される側面を研究することにより、ヨーロッパとアジアとの文化的接触、異文化間交流、そして情報や技術の伝播という問題に目を向けることができるようになったからです。

これは従来の経済史家があまり関心をもたなかったテーマであり、したがって取り組む価値のあるテーマであると考えましたし、その成果として、わたくしは今でもこの分野で、いろいろな場所でお話する機会をもつようになりました。

選んだ研究テーマは、もう少し正確に言えば、18世紀のマルセイユとアレppoの商業関係です。シリアのアレppo、現在戦乱の巷となっているアレppoは、かつて東西交易の中心であり、文化的な十字路だった重要な都市ですが、そのアレppo市場に集められるオスマン帝国北東部、シリアと上メソポタミア製の繊維品、とりわけ綿布と更紗をマルセイユが18世紀に輸入していた、その貿易をテーマにして博士論文を書きました。

それから日本へ帰国しましたが、先ほど申し上げたように、日本の西洋経済史学界とのずれがありましたので、なかなか日本語にしようという気持ちになれなかった。どんなふうに日本語にすべきかと悩みましたし、また博士論文はそのままフランスで出版されましたので、その日本語版の作成はしばらく保留し、帰国後20年くらい過ぎてから刊行したのが『商人と更紗』という本です。

そこで展開したテーマは、現在でもわたくしが歴史を考えるいろいろな素材を提供するものとして生きていますけれども、同時に留学中に研究する過程で関心をもったテーマを、帰国後に発展させたいと考えるようになり、いくつかのテーマを開拓してまいりました。その最初は港湾都市論で、これに関しては地中海学会月報にも書いたことがあります⁴、勝田さんが先ほどトリニティ・カレッジに留学していらした間は、埃にまみれた古文書を毎日読み解くのに精一杯だったとお話されていましたが、その点はわたくしも一緒に、18世紀の黄色く変色した紙に、ときには消えかけたインクで書かれた文書、またときには裏面のインクが表ににじんで表と裏の文字が重なり合い、判読しにくい文書などと格闘しながら、毎日史料と向かい合う生活でした。ただ、正直なところ、わたくしにとり一番楽しかったのはこの時期で、なぜかという日本と日本の学界内部のいろいろな議論とか、こう言えば必ずこう批判されるだろうとか、こういう問題を論じても相手にされないだろうとか、そんな余計なことを考えずに、すべてを忘れて毎日史料だけを読むことができた、その貴重な体験を味わえたのが一番大切なことだったからです。ところでそういう毎日を送っているときにふと感じたのは、わたくしが毎日マルセイユの商工会議所の古文書館（これは旧港に隣接する19世紀の建物のなかにあり、当時はその4階でしたが、今では1階に移転しました）、その古文書館で史料を読みながらふと思ったことは、自分は18世紀の古文書ばかり読んでいるけれど、自分が毎日通っているマルセイユの町について、都市の構造について、また港の景観を構成するさまざまな事物について何も知らないではないか、ということです。そこで港町の現在の姿と、それを数世紀または十数世紀にわたり形成してきた歴史との関係を再構成してみたい、それであればマルセイユだけでなく、同じ観点からフランス各地の港と比較する作業を

⁴ 深沢克己「自著を語る『海港と文明—近世フランスの港町』」『地中海学会月報』258号、2003年3月、7頁。

してみたい、という歴史地理学の構想に行き着きました。その結果できたのが『海港と文明』、先ほどから勝田さんが引用してくださった本です。この作業をひととおり終えたのが 2002 年であり、この書物を刊行した後も、『港町の世界史』など、港湾関連の研究プロジェクトにお誘いいただくことが多いので、この分野の研究を続けていますが、しかし個人研究としては一段落し、そこから関心は大別して二つの方向に発展していきます。

一つはフランス港湾都市の研究の延長上に、視野をアジアまで広げて、アジアの港町との比較研究を試みることに。これは東洋文化研究所の羽田正さんからお誘いを受けて、イスラーム地域研究、あるいは文学部の小島毅先生のお誘いを受けて、「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」という大型科研プロジェクトに加えていただき、韓国と中国からインドにいたるアジア各地の港町の現地調査を行う機会があったからです。東地中海の港湾都市については、自分の眼で観察し、自分の研究を通じて多少は知っていましたが、これらのプロジェクトへの参加を通じて、港町の研究をより広い地理的空間のもとで継続することができた、これが一つの方角であると思います。

もう一つの方角は、それら商業都市の研究を通じて、そこに表れるいくつかの社会現象と文化現象に注目する作業で、その最初のもものはガスパラン研究で出会った宗教的少数派の問題、これは勝田さんとのお話にも出ましたが、フランスで学位論文を書いている間に、アルメニア人、ユダヤ人、スイスを拠点とする亡命ユグノなど、いわゆる離散共同体のもつ固有の商業的・経済的機能に関心をもっていましたから、ディアスポラ論の一環として、その経済的・社会的ネットワークを研究する課題が最初に浮上しました。さらにそこから発展して、これらディアスポラの存在を受容し、またはディアスポラが各地の社会に適合しようとするときに生じる異宗教の共存状態、あるいは宗教的多元性、そしてこの共存状態を許容する思想的態度、これを取りあえず「宗教的寛容」と呼んでいいと思いますが、そういう問題に惹かれるようになりました。

ちょうどその時に重なったのが、1998 年のナント王令 400 周年記念事業です。このときジャック・シラク政権のもとで、フランス政府が積極的に後援して多くの記念行事や記念学会が催され、多数の出版物も刊行されましたが、フランスだけでなく、同じ年にオランダ、イギリス、スイス、その他の国々でも同じ問題、すなわちナント王令を一事例としながら、16 世紀から 17 世紀にかけて全ヨーロッパ規模であらわれる異宗派共存、またはどのように異宗派を許容するかという宗教的寛容の問題、これはポーランド・リトアニア王国からイングランド王国に至るまで、多様な法令により解決が試みられた問題ですが、このテーマがヨーロッパ規模で歴史学界の注目を集めました。わたくしもそれに関心をもって科研のプロジェクトを組織し、その成果を『信仰と他者』という書物にまとめました。これを通じてわたくしは宗教史、方法論的な観点に配慮すれば、宗教社会史と呼ぶべき課題へと急速に傾斜していきました。これが第二の課題です。

それにつづく第三の課題は、異宗教の共存状態、そしてディアスポラとの内面的親和性をもって発展する社交形態、すなわち 17 世紀に徐々に自然発生的に形を整え、18 世紀初頭からイングランド中心にその制度化が進んでくるフリーメイソン団の社交組織でした。これに関心をもつようになった経緯はもちろん他にもあり、フランス留学中にモーツァルトの『魔笛』を分析した音楽史家ジャック・シャイエの著書を偶然に購入し、

それを読んで強い衝撃を受けたことや、その後ワグナーの楽劇または神聖祭典劇『パルジファル』を分析した同じシャイエの名著を読むことにより、ヨーロッパ精神史上きわめて重要で、本質的な底流をなすにもかかわらず、歴史学、とりわけ日本の西洋史学が正面から取り組んでこなかったフリーメイソン団と、そこに体现される思想形態とに関心を抱くようになりました。しかもフリーメイソンの組織はとりわけ貿易商人の間に広まっていた組織でもあり、調べてみるとマルセイユではプロテスタントを含むエリート商人の大多数がフリーメイソンです。同じことはボルドー商人についても言えます。ボルドーで一流の貿易商人はドイツ系プロテスタントも含めてほとんどがフリーメイソンです。そのほかにボルドーでは、高等法院司法官や弁護士など、多くの人々が加入していますので、18世紀の社会史・思想史を考えるうえで避けて通れない問題であることもわかりました。これも幸運な偶然というべきですが、同じ1990年代末ごろ、現在ではわたくしの親しい友人になったピエール＝イヴ・ボルペールさんがわずか20歳代後半で分厚い博士論文を出版し、卓越した研究としてフランスのル・モンド賞を獲得しました⁵。ボルペールさんはこの著書のなかで、18世紀フランスを中心に、ヨーロッパ全域と植民地世界に及ぶ広い視野のもとで、フリーメイソン団の国際的社交組織としての機能、およびその文化史的意義を包括的に分析しており、強烈な刺激を受けました。わたくしも彼のような研究者の出現により力づけられ、思い切ってこの世界に飛び込む決断ができました。その後ボルペールさんを日本にお招きして講演をしていただき、それを翻訳して山川出版社から出しましたけれど、そういう経緯をへて新しいテーマであるフリーメイソン史を、宗教社会史および港湾都市論と並行して研究するようになりました。ところでフリーメイソン史は、大別して三つまたは四つの次元からアプローチすることができます。その第一は伝統的な手法であり、政治史・制度史の視点からみたフリーメイソン史です。たとえば国家権力やカトリック教会との関係において、合法化されない秘密社交組織の制度的確立過程を論じる立場です。

第二の次元は社会史的アプローチで、これに先鞭をつけたのはアナール学派の高名な歴史家モリス・アギュロンですが、それまでの宗教的なカトリック兄弟団その他の社交形態から、キリスト教的束縛から自由な世俗的社交形態としてフリーメイソン団を論じる立場です。同じような視点は、たとえば同じくフランスの歴史家ダニエル・ロッシュが、地方アカデミーの組織と並ぶ民間の自発的な知的社交組織としてフリーメイソン団を論じた研究にも見られます。これに対してボルペールさんの研究は、それを一挙に国際的次元に広げ、しかも従来のように固定的・静態的な社会構造論の視点から分析するのではなく、人生の軌跡という視点から、個々人のフリーメイソン活動の経歴を束ね、それらを相互に関連させることにより、動態的社会史の方法を構築したところに独創性があり、さらにフランスなど特定の国や地域に限定されない全ヨーロッパ的・国際的次元の運動としてとらえたところに斬新さがありますので、これを第三の次元と考えていいと思います。

ただし第四の次元として、やはりこれは単なる社交組織ではなく、そこには特有の思

⁵ Pierre-Yves Beaurepaire, *L'Autre et le Frère. L'Étranger et la Franc-maçonnerie en France au XVIII^e siècle*, Paris, Honoré Champion, Les dix-huitièmes siècles 23, 1998, 872 p.



想的前提があります。これは古くさかのぼれば、古代アレクサンドリアのヘルメス学に到達し、そこから下って中世以降のヨーロッパで形成される錬金術の伝統、さらに 16-17 世紀に勃興する神智学の思想潮流が 18 世紀中にフリーメイソン団内部に多様な形で浸透し、それら思想潮流のいわば受け皿として秘密友愛団が機能したのは歴史的理由があることですから、フリーメイソン現象を思想史上の問題として扱うという課題を避けることはできません。この最後の次元はこうして秘教思想史、エゾテリスムの歴史へと発展し、わたくしも現在の課題のひとつとして、このような思想を抱き、それを儀礼化した人々が解決を試みた問題は何だったのかを考えながら、宗教問題を中心に、現代的課題への展望を得たいと願っています。

大まかに整理すれば、以上でほぼ現在までの経歴を要約したことになると思います。

勝田：『海港と文明』でですね、「すべて重要な選択においては、情熱が先に来て、理屈は後からついてくる」とお書きになっています。やっぱり先生それって特に留学される前後の時期においてそうだったと考えられるんですけど、そうでしょうか。

深沢：そうですね。というよりも、実はそこが大切なだと認識することにより、自分自身のためらいや悩みを克服することができた、といった方がよろしいかもしれません。

勝田：高橋史学とは違う、そして留学されている頃登場してきたウォラステインのそれとも違う形の経済史研究ですね。それは先生の用語でいうところの「不易と流行」の「不易」の領域の作業だったと理解するんですけど、更紗のサンプルを発見なさったのは、マルセイユでの商工会議所での研究でしたっけ。

深沢：更紗の現物見本は、商工会議所ではなく、同じマルセイユにあるブッシュ＝デュ

＝ローヌ県文書館の文書のなかです。

勝田：ああ、そうでしたか。これは単純な好奇心なんですけれども、それを発見なさったときのご心境に興味があるんですけど。あれはあのご本のなかでも一番重要な章の一つですよ。

深沢：そうですね。たしかに一番よく引用される箇所、フランス語その他のヨーロッパ言語の文献中によく引用されますが、ほとんどあそこばかり引用されますので、わたくしとしてはもう少し別の箇所も引用してほしい気がするのですが。

ただ、わたくしが今でも時々いろいろな場所で、たとえば最近では五島美術館の古更紗展や、国際服飾学会の大会講演などにお招きを受け、更紗に関する講演をすることが多いのですが、その理由はすべてこの発見にかかわっています。

どういう心境だったかといわれても、すぐには思い出せませんが、もちろんうれしかった、発見の喜びがあったことは間違いありません。なぜかという、綿布や更紗に限らず、貿易統計を調べていて困ることの一つは繊維製品の名称がやたらと多くて、それぞれの製品の特徴がわからないことです。たとえばオリーブ油や小麦や綿花ならば、品質の差異を除けば一種類ですから、すぐわかります。場合により原産地名がついているか否か程度のちがいです。でも繊維製品の名称は非常に多い。しかもそれぞれがどんな素材、製糸・織布技術、染色法、図柄、仕上げ加工、用途などに照応しているのかは、インドやペルシアの製品でもそうですが、名前を見てもわからない。ですから先達の研究者たちも、たいていは最初からあきらめてしまい、「これらの多様な名前の背後に、いかなる技術的現実が隠されていたのかは、現在では知りようがない」などと書いていました。ですからわたくしもそう思いつつ研究していましたが、でもやはりペルシア語起源の「アジャミ」ajami という名称や、おそらく西北インド・グジャラート起源であると考えられる「ジャフラカニ」jafracani という名称が出てくれば好奇心をそそります。しかも当時それらは何万反も輸入されている重要な商品です。しかしそれらがどんな製品かまったくわからない。そのことをずっと気にしながら研究していたのですが、ある日マルセイユの県文書館で、文書を開いていたら突然に見本帳が出てきた。何かはわからないが、多様な色に染められた薄地の上質な綿布もあれば、粗糸で織った単色の製品もあり、茜染めもあれば、藍染めもある。それらの見本にはすべて記号がついていましたが、説明はありません。この見本帳を説明する文書がどこかにないかと思って探したら、まったく別系列の文書群、すなわち同じ地方長官文書に分類されながら、見本帳は商工業関連文書に、説明文書は徴税請負文書にそれぞれ保管されていた。いずれも 18 世紀の製造業視察官が作成した文書で、対象は密貿易品です。つまり密輸の容疑で没収した商品の見本帳を作り、それぞれの見本に関する説明文を作成したのですが、二つが別々に保存されたので、これまでの研究者はそれらを比較対照することができなかった。わたくしは両方の史料を比較し、それらに対応することを確認できたので、そこから個々の名称に対応する商品を自分の眼で観察し、手で触れることができました。この貴重な体験を味わえたので、18 世紀当時、さらには 17 世紀のオスマン帝国で製造された綿製品と染織品がどんなものだったかをようやく突きとめ、その技術や図柄の源流がペルシア経由で西北インドから伝来したことを確定できました。わたくし以前にも、インドの染色技術がヨーロッパに伝えられたのは、東インド会社船舶による喜望峯航路ではなく、

おそらくペルシアとオスマン帝国の隊商路を経由してではないか、という仮説が出されてはいましたが、単なる推論で何の根拠もなかったのです。しかしわたくしがその見本帳を発見し分析した結果、その経路をほとんど疑う余地がない段階にまで到達しました。それはわたくしが四年にわたり史料を読んだささやかな成果の一つですが、それは自分の眼で確かめた事実であり、自分の前に誰かが言ったからでもなく、また誰かが言わなかったからでもない、自分の手で確定した事実、そこから疑いえない一定の因果関係と相互関連の糸を紡ぎだせる確信を得た、という意味で、わたくしにとって大きな糧になりました。これは大上段な理論を振りかざすよりも、たった一つの小さな真実から得るものの方が大きいことの証であると、少なくとも自分は考えています。

ところで勝田さんが、トリニティ・カレッジに留学されたのは何年間でしょうか。

勝田：最初の留学が丸二年ですね。ですからもっと長くいればよかったんですけど、早めに切り上げて帰ってきました。

深沢：最初のということは、二度目にもいらしている。

勝田：八か月いたこともあり、そのあと五か月かな、そういう形になります。

深沢：なるほど。それぞれの研究者により史料探索の体験はちがうと思いますが、勝田さん御自身の史料探索の過程で、印象に残る体験は何かありましたか。

勝田：それは実は言いたくてたまらなかったんですけど、先生が聞いてくださったので。百姓一揆の関連の文書、警察関係の史料なんですけれど、読んでいるとアイルランド農民がいかに乱暴者かということばかりが記述されているんですね。まあ警察史料ですから犯罪者扱いなんですけど。でもこれはホブズボームの影響なんですけど、彼らは一種の義賊として活動していた面があったはずなんだ、つまり自分たちを単なる犯罪者ではなくて、彼らなりの正義の体現者と思って活動していたんだというイメージをもって史料をよんでいたところ、そういう人間が出てきたんですね。その瞬間はやっぱり今でも覚えています。だから、そういう人間が出てきた、そういう人間についての供述が出てきたときには拍手したくなったような感じでした。

深沢：その供述ではどんなことが語られていて、おっしゃったことを読み取とれるのでしょうか。

勝田：これはですね、要するに警察が取り調べをやった時に、本人を取り調べるのとは別に証人を取り調べた際に、この一揆をおこしたリーダーというのはそんなに乱暴者ではなくて、一揆勢が金目のものがあるからとてしまえといったときに、そんなことをやってはいかんだと言った、それからレディに対して非常に紳士的に振る舞ったんだ、という供述が出てくるんですね。その時にこのリーダーは、我々は単なる物取りではないんだということを言うのです。ただ、これは先生の場合とちがって、こういう形の一揆のリーダーというのはおそらくヨーロッパのどこでもいたはずで、それがアイルランドでも出てきたということですから、それほど革新的な発見だったのかどうかわかりません。ただ個人的体験としては鮮烈だったんですけど。

ところで、さっきの先生のお話でも、深沢先生のレンジの広さというのは改めてわかったと思うんですけど、こういうことも私が助手だった時に言っていて、非常に印象に残っているんですけど、その一つ目が、できるだけ自分と専門分野のちがう人間と付き合いなさい、その方が実入りがあるんだよ、と言って下さったんですね。

深沢：そんな生意気なことを言いましたか。

勝田：いえいえ。それはそうしとおっしゃったのではなくて、もし自分が何かアドヴァイスできることがあるのであればこういうことかな、という示唆してくださった形なんですね。地中海世界からはじまってインドに行かれて更紗の職人をご覧になり、さらに中国の港湾から日本の宗教もご自分の眼で見ておいでになるなど、深沢先生は知的活動の場がすごく広いですよ。先生はやはり今でもあの言葉は修正なさらないんですよ。やっぱり同じような分野の人の方がいいよとおっしゃらない。

深沢：たぶんこれは学問に限らず、わたくし自身の生き方の本質的部分にかかわるのだらうと思います。また他方では、もしもわたくしの研究テーマを概念化すると、そのうちの一つは「他者性」になるでしょう。その「他者性」を論じようとする人間が、自ら他者と出会うことを恐れているようでは、そもそもこの問題を論じる資格はないわけですね。ですからその意味では、わたくしの場合ある程度意識して、ただし無理に努力して、という意味ではなく、むしろ自分の願望につき動かされて、広い意味での他者と自分とを向き合わせ、そこから何かをくみ取りたいという気持ちをもっています。ですからかりに宗教問題を扱うにしても、キリスト教世界の内部でカトリックとプロテスタントの対立だけを考えていれば楽なのですが、わたくしの場合は早くからイスラーム研究者ともお付き合いをもつことになり、羽田正さん、佐藤次高さん、三浦徹さん、黒木英充さんなど、多くのすぐれたイスラーム地域研究者と交流をもってきましたので、自分の研究対象であるキリスト教世界を否応なく相対化せざるを得ませんでした。さらに先ほどもお話しした秘教思想を勉強しはじめたとき、必然的にアジア諸宗教にまで視野を広げることになりました。インドのヒンドゥー教や仏教から日本の真言密教まで、いわゆる一神教には分類されない東洋の諸宗教について自分で学び、考えてみたいという願望は、どうしても抑制することはできないし、それを勉強しないと、キリスト教自体も現時点で正しく認識できないだろうという気持ちをもっています。

勝田：そうです。宗教についてもユーラシア的な規模で考えるということでした。先生がご自分の歴史学を概念化するとしたら、一つのキーワードは他者性だと仰いました。私から見ますと、内面性というのも、もう一つのキーワードかなというふうに思えるんです。と言いますのは、フリーメイソンの時に仰いましたけれども、メイソンたちの、思想的な内面の深みというのを先生は強調されますし、あと、何回か研究会で言われたことですが、アンリ四世が何回も改宗を繰り返したのは政治的便宜だったのではなくて、自身の内面の信仰の問題としても考えるべきなんだと仰っています。ここのところはとても大事なことかと思うんですね。特にアイルランドの歴史と、それから私の傾向がそうなのかもしれないんですけど、現象を政治的に読み解こうとしてしまう、それも上から目線でなんですけども。先生は、そういう態度はおとりにならない。むしろ、それじゃだめなんだということをはっきり、何箇所かでお書きになっています。これで、ここからどうつなげようかと思ったんですけれど、19世紀のあのいわゆる社会思想に対して批判的でいらっしゃいますよね。この点について...

深沢：19世紀の社会思想に対して、批判的ですか？

勝田：そうですね、じゃあ単純化しすぎたかもしれませんが、近世思想が持っていたあの広がりと言ったものをどうも薄める作用があったんじゃないか、という意味のことを仰っていたように記憶しています。これ私の誤解かもしれませんが、むしろ訂正していただいた

方がいいかもしれません。

深沢：現代の歴史家の視点から、ある特定の論理のもとに過去を裁断しようとするやり方に対して、警戒心をもつべきだというのは、たしかにわたくしが繰り返し申し上げていることです。たとえば昨年日本西洋史学会大会の小シンポジウムでも、19世紀から20世紀にいたるカトリシズムを論じましたが、これは京都産業大学（当時）のドイツ史研究者・中野智世さんの企画されたシンポジウムで、この企画の意義の一つとしてわたくしが強調した点は、カトリシズムまたは一般に宗教問題を論じるときに、それが当時の政治的文脈の中でどういう「客観的」役割や機能をもったか、という機能主義的立場ではなく、マクス・ヴェーバーのいう理解の方法、つまりある行動を起こした人が、その行動に対してどのような主観的意味をあたえたのか、いかなる宗教的信念や霊性にもとづいて行為を選択したのか、という地点から出発して考えることが大切だと申し上げたのは、まさにそういう関心から発言したわけですね。

後半部分の御質問については、その趣旨をよく理解できないので、思いつくままにお話しますと、わたくしは『海港と文明』という書物のなかで、18世紀と19世紀とをむしろ連続性のもとに描こうとしました。経済史や社会文化史の視点からみて、近世は19世紀前半くらいまでつづいたのではないかと。たとえば産業資本家が社会の前面に出てくるのも比較的遅く、バルザックの時代までフランス経済界の花形は、「ネゴシアン」つまり卸売商でした。工場を営んでいる場合でも、並行して商業・貿易をもちこなす実業家は、ネゴシアンを自称し、自分を「ファブリカン」（製造業者）とは呼ばない。当時まだ製造業者は卸売商より社会的地位が低いからで、その意味では連続性が認められる。またこれは以前に羽田正さんとの対談でも申しましたが、19世紀フランスではパリをはじめ多くの諸都市で改造計画が実施され、都市の景観は大きく変化しますが、そこに採用された建築様式や市街形成のコンセプトは、現時点からふりかえれば、18世紀以来さほど変化していない面もあり、この領域でも連続性のもとにとらえることは可能かもしれません。しかしもちろん他方では、見えない変化が進行したことも事実です。たとえばこれも社会思想とは直接に関係がないのですが、わたくしの知り合いでジュネーヴ在住の古更紗専門家・取引商である女性と御一緒したとき、その人が「18世紀の更紗と19世紀の更紗とは一目見れば区別がつかず、18世紀の更紗には何とも言えない風格がありますが、19世紀にはそれが失われます」と仰っていました。そう言われて比べてみると、なるほど彼女の言われるとおりだと、何年か過ぎてから理解できました。その意味で、18世紀と19世紀、その転換期がいつかという問題はべつにして、そこに何らかの文化的変異、少なくとも工芸史または染織史の分野で変異が生じたことはまちがいないと思います。さらにもうひとつ、18世紀から19世紀への変化として思いつくのは、先ほどから話題にしているフリーメイソンの場合です。啓蒙期のフリーメイソン団は、その内部にすべてを、すなわち当時のヨーロッパ文化と社会のすべてを読み取ることができる小宇宙という性格をもちました。ところが19世紀には、そこから多くの要素が排除されてゆきます。その結果、フリーメイソン団の内包がしだいに縮小する傾向が認められます。同時に運動の国際性またはコスモポリタンの性格が失われて、やがて国民単位の、その意味で閉鎖的な組織になっていくのも19世紀の傾向です。それらすべてを共通の尺度で説明できるかどうかはともかく、19世紀に何かが失われてゆく感覚は、たしかにわたくしはもっています。

勝田：それです、それです。その、何かが失われていった時代なんだったということですよ

ね。それで最後のフリーメイソンのところ、これはカステラネともう一人誰でしたっけ、マルセイユで喧嘩した二人です。あれが先駆的な対比ということになりますか。

深沢：ひとつの要素はそこにあると思います。わたくしが『友愛と秘密のヨーロッパ社会文化史』所収の論文であつかったテーマは、クロード＝フランソワ・アシャールという人物、18世紀末マルセイユの医者でありながら、早くからメスメリズムに傾倒し、しかも敬虔なカトリックであり、ドイツ起源の騎士团的・キリスト教的フリーメイソンの流派に加入した人物ですが、彼は博愛主義的なコスモポリタンであると同時に、アントン・メスマーの思想をはじめ、当時の秘教思想に深く感化された人です。この人とアントワヌ・カステラネとが同じ「三重団結」会所の内部紛争で対立し、主導権争いの結果カステラネは排除されます。このカステラネという人物は公証人でしたが、この時点ではブルボン王朝への忠誠の形をとるフランス・ナショナリズムに強く傾斜し、外国起源のフリーメイソン組織を敵視し、外国起源の儀礼や思想を排除する傾向を明示していました。要するに世界市民的・カトリック的・秘教的なアシャールと、国民的・世俗的・政治的なカステラネ、これら両者の思想的対立は明白であり、たしかにコップの中の嵐のように小さな世界の出来事です。そこに18世紀ヨーロッパ思想史の転換点が凝縮されていることを読み取ろうとしました。なおこの論文の中では論じていませんが、このカステラネという人物は、フランス革命期に連邦主義反乱の指導者になります。すなわちパリのジャコバン派・山岳派政府に対抗して、マルセイユで連邦主義反乱を組織したセクションの指導者になるのです。ですからカステラネは、フランス革命に積極的に関与した政治家としても象徴的な人物であると思います。他方では、19世紀にはいるとアシャールのようにキリスト教的な立場から普遍的博愛の理念をかかげ、慈善・救護活動を推進しようとする運動は転換期をむかえ、宗教的要素はやがてフリーメイソン団から徐々に排除されていきます。それと同時に、メスメリズムも含めて、秘教的要素もしだいにそこから排除される。バルザックの小説に『絶対の探求』というやや長い作品がありますが、それを読んでもわかるように、すでにバルザックの時代には、錬金術はフランス社会で軽蔑の対象になっています。そこではすでに時代の転換が始まり、したがってそれ以降、百年後の20世紀にカール・グスタフ・ユングが心理学の分析対象として錬金術を復活させるときまで、錬金術を含むヨーロッパ秘教思想の伝統は、公認された思想史や文化史の領域から追放される運命をたどることになります。そして同時に、19世紀後半にブラヴァツキー夫人の創立した神智学協会の運動から、ルドルフ・シュタイナーの「人智学」やルネ・ゲノンの「本源的传统」にいたるまで、秘教思想の再生は、フリーメイソン団の外部で展開されていきます。この意味でも19世紀のある時期に、社会史的・思想史的な転換が生じたことは確実だと思います。

勝田：これは確認なんですけれど、実は経済史において近世史的な原理というのが19世紀まで続いていったんだって仰ったときには、そこに家族的な構成要素の存続も含めてよろしいわけですね。

深沢：そのとおりだと思います。いつごろまでと明確には申し上げられませんが、『海港と文明』でも論じた家族的資本主義は、イギリスでも長らく持続します。株式会社は例外的形態にとどまり、海上保険会社など特殊な分野では早くからみられるとしても、一般の商社や企業では、家族的資本主義が長らく支配的形態だったと考えてよいと思います。

勝田：社名を見ると何とか& Sonsというのが非常に多い。これフランスでもそうでしょうか。

深沢：そうですね。あるいは、& Brothers とか。

勝田：そうですね。パートナーシップ。

深沢：そう、パートナーシップです。具体的には合名会社や合資会社の形態ですね。

勝田：それと、モノ作りよりかは商人、しかも貿易商の方が格が上なんだというのは都市のギルドは皆そうですね。ギルドではどれもマーチャントという方が明らかに格上で、製造業者というのは格下のギルドというふうにどの都市でも大体そうになっているような気がいたします。ダブリンでも完全にそうでした。

そうだ、一つ補足がありました、先生。さっきのウェーバーの理解社会学のところで、現代の立場ですね、現代に生きている人間の視点を前面に出して過去の人間を読み解いてしまうだけではだめなんだということを先生は仰いましたけど、でも実は先生のお立場は、いわゆる歴史性に埋没する立場でもないということですよ。ここは確認しておかないといけないと思います。とりあえず私の考えを言いますと、やっぱり過去と現在との対話なので、現在から見た楽観説、あるいは過去から見た悲観説のどちらか一方に偏ることのないようにしないといけない。現代世界を見通すために、過去から展望を伸ばすんだと言う立場と理解しているんですけど、それでよろしいでしょうか。

深沢：御指摘の問題について、一般的な命題を提示するのはむずかしいと思います。あえて一般論を言えば、わたくしたちは 21 世紀初頭の現代を生きていますから、そこで毎日を生きる自分の実存から過去への問いを立てざるをえない、という意味ではつねに現在が出発点になるでしょう。しかしだからといって、現在の価値判断や思考の枠組みによって過去を裁断してしまうことはできない。もちろんこの二つは両立するはずなので、現在の関心から過去を眺めながら、その過去に内在する論理を再発見することにより現在を相対化し、それにより自己の存在被拘束性を超えて、将来への展望を切り開くことが可能になるはずです。もしそういう可能性がないのなら、そもそも歴史など学ぶ必要もない。現在のことだけを考えて問題を解決すればよい。つまり他者としての過去と向き合うことにより、現在のわれわれを相対化し、現在の価値尺度を批判的に考えなおす素材を見出すことが、歴史学をする意味だろうと考えています。

勝田：こういう考え方はどうでしょうか。たとえば対象を認識するときに、そこから時間性を排除することは出来ませんよね。つまりある対象の現在を認識しているつもりでも、実は対象の過去と一緒に認識していることになりますよね。その意味で、人間の認識から常に歴史性というものは拭い去ることは出来ないような気がするんです。ということは逆に、対象の過去についての理解、これを歴史と呼ぶと、これが変わると現代が変わるという可能性がありますませんか。

深沢：現在についての認識が変わるという意味ですね。仰るとおりだと思いますが。

勝田：その意味で、私なんかの考えですと、歴史学って恐ろしい学問だって気がするんですね。そこがアイルランドの修正主義ともかかわるんですけども、過去をどういじるかによって現代が変わってしまう恐ろしさがある。これ、フランスの歴史学だとやっぱり革命について最も言えることでしょうか。革命の解釈が変わるということで...

深沢：革命の解釈がフランス史叙述の全体に枠組みをあたえた時代は、革命 200 周年をさかいに終わったとは言えないまでも、かなり弱まったと思います。

勝田：あれでミッテランの試みは失敗したって先生は仰ってますね。つまりああいうやり方

で過去を動員するというやり方が、無意味だということが分かってきた。

深沢：無意味というよりは困難が露呈したということです。そこでわたくしからお尋ねしたいのは、勝田さんが今から 16 年ほどまえにお書きになった論文で分析されたアイルランド史研究の動向は、その後に新しい展開や発展がみられるのでしょうか。

勝田：ええ。要するに研究対象の拡大、分散ですが、これはアイルランドだけでなくどこでも見られるんだと思います。それと、一つははっきり言えるのは、イギリスとの関係ばかりにこだわるんじゃなくて、ヨーロッパとの連関を問うという思考法が強くなってきていると思います。

深沢：その背景は何でしょうか。やはり EU なののでしょうか？

勝田：やはり EU じゃないでしょうか。それと今はもうだめになっちゃいましたが、ある時期のアイルランドは EU の中でも優等生だったのと、経済が好調だったときに大量の移民が来たんですね、1990 年代の終わりから、21 世紀の初めに。そうするとやっぱり東ヨーロッパからたくさんの人間が来るようになって、ダブリンが第二の黄金時代のようなものを迎えたと言っていいと思います、第一を 18 世紀だとすると。20 世紀の終わりから 21 世紀の初めに。まあ、マルセイユとはまた別だとは思いますが、中国人とそれから東ヨーロッパからの人が大量に入ってきて、多文化交流の場になりました。そここのところも大きかったと思います。

深沢：それはダブリンだけの現象なのか、それともアイルランド全域に波及したのか。

勝田：大都市には、大なり小なり人がいるようになりましたけれど、基本的にはダブリンと、それから北アイルランドのベルファストです。ベルファストも公共交通機関なんかの表示を見ますとマルチリンガルな街になっていったようです。だからもはや、こういう歴史学は善なのか悪なのかという、モラルの次元で裁いてしまう傾向は完全に過去のものになったと言っていいと思います。

深沢：そのようにブリテン諸島史またはヨーロッパ史の枠組みでアイルランド史を考える新動向のなかで、新しい研究の視点や概念、新しい研究領域が生まれたのでしょうか。

勝田：これだというのは見当たらないですね。みな誰もが自由にやって、ものを言い合っているようですが...

深沢：これはフランス歴史学の場合もそうだと思いますが、1990 年代以降は支配的な歴史解釈の方法や理論が見当たらなくなりましたね。やはりイギリス史でもそうでしょうか。

勝田：そう思えるんです、はい。特にアイルランドの場合ですと、この国は普通の国なんだよという発想をなんとかしようとしているんですね。アイルランド特殊論というのを無くそうとしている。ヨーロッパの他の国で使われている概念で、アイルランド史もかなり説明できるんだよという方向に、それを様々な形で研究に使っている、そう見えます。

深沢：どうでしょうか。だんだん話が固くなってきたので、この辺で学生諸君にバトンを回して、少し気軽に自由な討論をしてみましょうか。

(大学院生たちとの討論は掲載省略)

司会：それでは最後に、先生の方から若い研究者に向けて一言メッセージをお願いしたいと思うんですけど...

深沢：そうですね、いささか困るご要望で、わたくしは相手が誰であれ、次世代の学生の皆さんも含めて、自分からメッセージやアドバイスを送る資格があるとは思えません。わたくし

しの人生は、わたくし自身にとってのみ意味があり、他の人にとって意味があるとは思えませんから、自分が教師だとしても、学生の皆さんに伝達すべきことがあるとは思っていない。ですから、わたくし自身が考えるものの見方や感情を共有できたらいいなと思うことを要約して申し上げるほかないと思いますが、全部で三点くらいになるでしょうか。

第一に、わたくしがフランス留学から帰った頃は、いわゆるアナール学派の紹介・翻訳の最盛期で、同学派のフランスの歴史家がもちいた概念や理論的枠組みが日本の歴史学でも採用され、華やかに論じられた時代でした。しかしその後アナール学派の影響力が色あせ、ふたたび新しい思考の枠組みが求められ、ピエール・ブルデュやノルベルト・エリアス、最近ではユルゲン・ハーバマスなどの概念装置が歴史家により使用されるようになりました。他方では川北稔氏の紹介・翻訳によりウォラステインの世界システム論も長らく採用されてきました。それも最近ではさすがに陰りが出てきて、カリフォルニア学派のポメラントツなどの議論が日本で取り上げられ、いわゆるグローバル・ヒストリーの理論が主張される現状ですが、わたくし自身はそういう流れとはいっても距離を置いてきました。良く言えば流れに棹差さない、悪く言えばいつも乗り遅れる研究生活を送ってきました。それをあえて自分のなかで正当化するなら、わたくしはやはり自分の頭で考えたことだけを信じますので、自分で考え、自分で史料を読み、分析し、その結果到達した結論が、かりに先人がすでに述べた見解と同じでも、自分自身の作業により到達したことに意味がある。ですから自分の頭脳で考える代わりに、外から借用してきた概念や理論により歴史を理解しようとは思わない。頭で考える代わりに、言葉に考えてもらうような営みはしたくないという気持ちをもってきました。どんなことでも同じですが、人から言われてやるのと、自分で発見し、自分で見出した手段でそれを実行するのでは全然意味がちがう。わたくしはそれをいわば本能的な原則にしてきました。これを史料論の次元で言いかえれば、さきほども例をあげたように、もっとも貴重な情報は、最初から目的意識的に探した史料ではなく、偶然に出会った史料のなかに隠されている。ですからもし、若い皆さんにあえて申し上げるなら、自分の関心に自分で答える作業のいわば原初的価値を、共有していただけたらいいなという気持ちは持っています。

べつの言いかたをすれば、一定の思考の枠組みを前提にして研究作業を組み立てる方法は、その枠組みが有効である限りは意味をなしますが、いつかそれが研究者共同体の内部または自分個人の内部で、意味を失うかもしれません。そういう枠組みに依拠して研究するのは、短期的には成果を上げるのに有益であり、華やかな議論をしたり、整った論文をまとめたりするには有効でしょう。でもわたくしの個人的経験や、また周囲の人たちを観察してきた経験からすると、本当の意味で持続性のある成果を形成するためには、必ずしもそれが賢明な方法とは限らない。むしろ一見愚鈍な、または非効率的な方法のように見えても、無心に史料に向き合うこと、史料と向き合うあいだは、何も求めず、成果を期待しないこと、何百部の史料を読んだらどれだけの利益があるはずだという功利性を求めない姿勢で史料を読むことが大切だと、わたくしは思います。それを皆さんに共有してもらうのが無理だとしても、自分の人生を振り返って、至りついた確信はそこにあります。

第二に、これも自分自身への反省を含めて申しますが、あまり若い研究者に独創性を要求しないほうがいいかもしれないと感じています。わたくしも教師の一員であり、わたくしも含めて西洋史の教員たちは、まず先行研究をよく分析し、先行研究を批判し、その研究史批判に基づいて自分自身の独創的な課題を組み立てなさい、という指示をあたえます。わたくし

し自身もそう言ってきましたが、じつはだんだん年を取るにしたがい、この指導方法に懐疑的になってきた。ということは、自分がまっとうな研究者共同体からドロップ・アウトしつつあるのかもしれませんが。さっき勝田さんが引用されたわたくしの文章で「すべて重要な選択においては、情熱が先にあり、理屈はあとからついてくる」と書いたのですが、わたくしはどうも研究の根幹的課題はつねに研究史批判から生まれるわけではないと、以前から思っていたようです。もちろん研究史批判は、研究者コミュニティ内部で学問を再生産していくのに必要な作業です。でもそれは、必ずしも現在を生きる人間にとって最重要な課題とはかぎらない。この両者の間にはつねに見えない溝があります。したがって歴史研究の内在的動機は、研究者共同体内部の閉ざされた環境から生まれてくるとはかぎらない、という点を自覚する必要があります。ですからあまり既存の研究史批判とそれに対置すべき自己のオリジナリティにこだわると、本当に自分にとり意味のあるテーマを見逃してしまう危険性がある。さらに付け加えて言えば、学部生が卒業論文を書くときにオリジナリティなどありえるか、わたくしは修士論文でもふつうは無理だと思います。ヨーロッパの研究者、その文化的伝統のなかで育った研究者たちが、20年も30年もかけて築いた歴史認識の体系を、われわれが極東の片隅で、ほんの1年か2年、または数年くらい学んだだけで、それを覆すような歴史観を本当に生みだせるのか。これは少なくとも自己反省の材料にすべきだろうと思います。かつてゲーテが、エッケルマンとの対話で、世の中では独創性などと言うけれど、わたくし自身が書いた作品の中で、独創的なものなど何もない、すべては自分に先立つ作家や芸術家たちが生み出したものを、何らかの形で継承し、いくらか自分らしいものに変えて公表しているに過ぎない、という意味のことを言っていますが、われわれもあまり「独創性」の強迫観念にとらわれない方がいいのではないかと、最近思っています。これが二つ目ですね。

第三に、さきほど院生諸君との討論でも話題になりましたが、研究費の申請など、わたくしの大学院時代とは若手研究者の勉学環境が変化し、研究助成を受ける機会は増えましたが、就職はむずかしくなり、専任職を獲得する道は狭くなる一方です。そういう状況下に、また歴史認識をめぐる大論争がほとんど消滅した平穏な環境下では、どうしても若い人たちは既存の学界が共有する枠組みの内部で、何とか研究をまとめようという志向が強くなります。そういう意味で、ある種の順応主義に染まりやすい。研究テーマの選択においても、なるべく正統的で無難なテーマを選択する傾向が生まれる。現在の就職状況から考えれば、そういう配慮もせざるをえないし、既存の研究者共同体の内部でいかにして評価されるかをまっさきに考えたいのは当然です。それは当然なのですが、その道だけを優先して、日本の西洋史研究がいわば単純再生産の構造の中にはいつてしまった場合にはどうなるか、それは何かを生み出しているのか、そして大学には所属しない、歴史学者でない多くの人たちに何かをもたらすだろうか、という不安はもっています。ですからこれもメッセージというより、わたくし自身が感じ、これからみなさんと一緒に考えていきたい課題だと思います。要するに以上3点のいずれも、わたくし自身の課題であり、皆さんとも議論を共有できたらいいな、という次元の事柄ですね。

司会：大変貴重なお話をありがとうございました。勝田先生、深沢先生、今日は本当にどうもありがとうございました。

深沢克己教授略歴

氏名 ふか さわ かつ み
 深 沢 克 己

生年月日 1949 年 8 月 31 日

現職 東京大学大学院人文社会系研究科教授（西洋史学専門分野）

学歴 1968 年 3 月 東京都立上野高等学校卒業
 1968 年 4 月 東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
 1973 年 3 月 東京大学文学部西洋史学科卒業
 1976 年 4 月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学専攻修士課程入学
 1978 年 3 月 同課程修了（文学修士）
 1978 年 4 月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学専攻博士課程入学
 （1984 年 3 月 同課程単位取得満期退学）
 1980 年 10 月 フランス・プロヴァンス第 1 大学第 3 課程（歴史と文明）登録
 1984 年 12 月 同課程修了 フランス第 3 課程博士号（歴史と文明）取得

職歴 1985 年 4 月 放送大学非常勤講師（フランス語）[1986 年 10 月まで]
 1986 年 4 月 国学院大学文学部非常勤講師（西洋史学）[1987 年 3 月まで]
 1986 年 12 月 九州大学文学部助教授（西洋史学）[1994 年 9 月まで]
 1994 年 10 月 九州大学文学部教授（同）
 1995 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（西洋史学）[併任]
 1995 年 10 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 [専任・現在に至る]
 1997 年 3-5 月 フランス・ボルドー第 3 大学歴史研究科客員教授（フランス史）
 2005 年 3-7 月 フランス・ニース大学文学部客員教授（地中海史）
 2007 年 6 月 フランス・南ブルターニュ大学人文社会科学部客員教授（歴史学）

学位 1978 年 3 月 文学修士（東京大学）
 1984 年 12 月 第 3 課程博士（フランス・プロヴァンス第 1 大学）

学位論文 *D'Alep à Marseille. Toiles de coton du Levant et commerce français au XVIII^e siècle.*
 Université de Provence (Aix-Marseille I), novembre 1984, 392 p.

賞罰 1986 年 11 月 フランス・マルセイユ学術アカデミー・エドワール・サマン賞受賞
 (Académie des Sciences, Lettres et Beaux Arts de Marseille, Prix Édouard Saman 1986)

主要業績目録

I. 著書

- 1) (単著) *Toilerie et commerce du Levant au XVIII^e siècle. D'Alep à Marseille*. Paris: Éditions du CNRS, janvier 1987, 247 p.
- 2) (共著) 近藤和彦編『西洋世界の歴史』(山川出版社、1999年9月) [分担執筆: 第3章4「経済生活の枠組み」および第3章5「植民帝国と世界経済」、156-185頁]
- 3) (編著)『近代ヨーロッパの探究9 国際商業』(ミネルヴァ書房、2002年5月)
- 4) (単著)『海港と文明—近世フランスの港町』(山川出版社、2002年10月)
- 5) (責任編集)『港町の世界史2 港町のトポグラフィ』(歴史学研究会編、青木書店、2006年1月)
- 6) (高山博との共編著)『信仰と他者—寛容と不寛容のヨーロッパ宗教社会史』(東京大学出版会、2006年10月)
- 7) (単著)『商人と更紗—近世フランス＝レヴァント貿易史研究』(東京大学出版会、2007年11月)
- 8) (編著)『ユーラシア諸宗教の関係史論—他者の受容、他者の排除』(勉誠出版、2010年11月)
- 9) (桜井万里子との共編著)『友愛と秘密のヨーロッパ社会文化史—古代秘儀宗教からフリーメイソン団まで』(東京大学出版会、2010年11月)

II. 学術論文

- 1) 「アドリアン・ド・ガスパランの農学思想—19世紀南フランス農業の発展方向との関連で」(『土地制度史学』84号、1979年7月、15-34頁)
- 2) 「レヴァント貿易と綿布—18世紀マルセイユ商業史序説」(『土地制度史学』109号、1985年10月、1-18頁)
- 3) 「レヴァント更紗とアルメニア商人—捺染技術の伝播と東西貿易」(『土地制度史学』111号、1986年4月、18-37頁)
- 4) « Commerce et contrebande des indiennes en Provence dans la deuxième moitié du XVIII^e siècle », *Annales du Midi*, tome 99-no. 178, avril-juin 1987, p. 175-192.
- 5) 「18世紀のレヴァント貿易とラングドック毛織物工業—アレppo向け毛織物輸出の変動をめぐって」(『土地制度史学』125号、1989年10月、1-20頁)
- 6) 「オスマン帝国期の国際商業都市アレppo」(『イスラムの都市性・研究報告』研究報告編59号、1990年2月、1-26頁)
- 7) 「18世紀のフランス王立アフリカ会社とピアストル銀貨」(『イスラムの都市性・研究報告』研究会報告編26号、1991年3月、49-70頁)
- 8) 「ルー商会文書の為替手形—18世紀金融技術の基礎研究」(『史淵』131輯、1994年3月、17-45頁)

- 9) 「18 世紀のフランス＝レヴァント貿易と国際金融—ルー商会文書の為替手形（上）」（『史淵』132 輯、1995 年 3 月、1-21 頁）
- 10) 「18 世紀のフランス＝レヴァント貿易と国際金融—ルー商会文書の為替手形（下）」（『史淵』133 輯、1996 年 3 月、1-31 頁）
- 11) 「18 世紀フランス国際商業と貨幣流通」（『MUSEUM KYUSHU—文明のクロスロード』51 号、1996 年 1 月、46-56 頁）
- 12) 「ヨーロッパ商業空間とディアスポラ」（『岩波講座世界歴史・第 15 巻 商人と市場—ネットワークの中の国家』岩波書店、1999 年 3 月、181-207 頁）
- 13) « Marseille, porte du Levant. Un essai de comparaison », in: Actes du 50^e congrès de la Fédération historique du Sud-Ouest, tome II, *Bordeaux, porte océane, carrefour européen*, Bordeaux, Fédération historique du Sud-Ouest, mars 1999, p. 581-593.
- 14) 「レヴァントのフランス商人—交易の形態と条件をめぐって」（歴史学研究会編『地中海世界史・第 3 巻 ネットワークのなかの地中海』青木書店、1999 年 5 月、113-142 頁）
- 15) « Les lettres de change et le commerce du Levant au XVIII^e siècle », in : Silvia Marzagalli et Hubert Bonin (dir.), *Négoce, ports et océans XVI^e-XX^e siècles. Mélanges offerts à Paul Butel*, Pessac, Presses universitaires de Bordeaux, avril 2000, p. 61-79.
- 16) 「フランス港湾都市の商業ネットワーク」（辛島昇・高山博編『地域の世界史・第 3 巻 地域の成り立ち』山川出版社、2000 年 6 月、201-237 頁）
- 17) 「フランス革命初期（1790 年）における地中海商業ネットワーク—為替手形による商人間コミュニケーション」（平成 10-12 年度科学研究費補助金・基盤研究 B・研究成果報告書『西欧の歴史世界とコミュニケーション』研究代表者・櫻井万里子、2001 年 3 月、16-37 頁）
- 18) 「近世フランスの河口内港—港町のトポグラフィ」（『歴史学研究』757 号、2001 年 12 月、24-35 頁）
- 19) 「比較史のなかの国際商業と国際秩序」（社会経済史学会編『社会経済史学会創立 70 周年記念・社会経済史学の課題と展望』有斐閣、2002 年、119-131 頁）
- 20) « Topographie et urbanisme de Marseille au XVIII^e siècle. Éssai d'histoire comparée », in: Institut de recherches sur les civilisations de l'Occident moderne. *Évolution des mondes modernes* (Séminaires de D.E.A., année 2001-2002). Paris: Université de Paris-Sorbonne, 2003, p.79-98.
- 21) « Urban Topography and Merchant Community of Marseilles in the Eighteenth Century », *AJAMES (Annals of Japan Association for Middle East Studies)*. no. 20-2, 2005, p. 145-169.
- 22) 「フランス海港都市のフリーメイソン—国際社交組織と秘教思想」（羽田正・責任編集『港町の世界史 3 港町に生きる』歴史学研究会編、青木書店、2006 年 2 月、323-347 頁）
- 23) « L'acceptation et l'exclusion de l'autre dans l'histoire française moderne », in: Yoshikazu Nakaji (dir.), *L'Autre de l'oeuvre*. Paris: Presses Universitaires de Vincennes, 2007, p. 299-312.
- 24) « Les ports méditerranéens et les grandes étapes du commerce du Levant à l'époque moderne »（平

- 成 17-19 年度科学研究費補助金・基盤研究 B・研究成果報告書『古代・中世・近現代ヨーロッパ港湾都市の空間構成と社会動態に関する比較史的研究』研究代表者・大津留厚、2008 年 3 月、1-21 頁)
- 25) « De l'Inde au Levant: routes du commerce, routes des indiennes », in: Gérard Le Bouëdec et Brigitte Nicolas (dir.), *Le goût de l'Inde*. Lorient-Rennes: Musée de la Compagnie des Indes/Presses Universitaires de Rennes, novembre 2008, p. 34-43.
- 26) « L'histoire française moderne vue du Japon : la place incertaine du XVIII^e siècle », *XVIII^e siècle*, no.248, juillet 2010, pp. 491-498.
- 27) 「18 世紀末フランスの知的エリートとフリーメイソン—マルセイユの医師アシャールの内面的軌跡」(立教大学史学会『史苑』72 巻 1 号、2011 年 12 月、57-76 頁)
- 28) 「近世フランスの王権と宗教—比較の視点から」(小島毅編『東アジアの王権と宗教』アジア遊学 151、勉誠出版、2012 年 3 月、132-142 頁)
- 29) « Claude-François Achard dans sa jeunesse: médecin, académicien et franc-maçon marseillais à la fin du XVIII^e siècle », *Provence historique*, t. LXII-fasc. 247, janvier-mars 2012, pp. 11-24.
- 30) 「啓蒙期フリーメイソンの儀礼と位階—石工伝統から騎士団伝説へ」(東洋大学『白山史学』48 号、2012 年 5 月、27-61 頁)
- 31) 「啓蒙期ヨーロッパのインド趣味—更紗流行の社会文化史的意義について」(『国際服飾学会誌』42 号、2012 年 11 月、4-15 頁)
- 32) « Du Rite français au Rite écossais rectifié. Le choix de la Loge de la *Triple Union* de Marseille à la fin du XVIII^e siècle », in: Pierre-Yves Beaurepaire, Kenneth Loiselle, Jean-Marie Mercier et Thierry Zarcone (dir.), *Diffusions et circulations des pratiques maçonniques XVIII^e-XX^e siècle*. Paris: Classiques Garnier, 2012, pp. 63-81.

III. 科学研究費補助金・研究成果報告書

- 1) (研究代表者)『18 世紀ヨーロッパ商業実務書類の基礎研究』(平成 6-8 年度科学研究費補助金・基盤研究 B-2、研究成果報告書、1997 年 3 月)
- 2) (研究代表者)『ヨーロッパにおける宗教的寛容と不寛容の生成・展開に関する比較史的研究』(平成 13-15 年度科学研究費補助金・基盤研究 B-2、研究成果報告書、2004 年 3 月)
- 3) (研究代表者)『ヨーロッパにおける宗教的・密儀的な団体・結社に関する比較社会史的研究』(平成 17-19 年度科学研究費補助金・基盤研究 B-2、研究成果報告書、2008 年 3 月)

IV. 書評・学界動向・史料紹介・新刊紹介

- 1) 「回顧と展望。1987 年の歴史学界、ヨーロッパ近代、フランス」(『史学雑誌』97 編 5 号、1988 年、355-362 頁)
- 2) « Le dernier ouvrage de Charles Carrière », *Annales du Midi*, tome 104-n^o 197, janvier-mars 1992, p. 100-102.

- 3) 「服部春彦著『フランス近代貿易の生成と展開』(『史学雑誌』102 編 3 号、1993 年、117-126 頁)
- 4) 「回顧と展望 1993 年の歴史学界 ヨーロッパ近代・一般」(『史学雑誌』103 編 5 号、1994 年、320-323 頁)
- 5) 「ポール・ビュテル教授連続講演会の報告」(『日仏歴史学会会報』10 号、1994 年 12 月、8-11 頁)
- 6) 「九州大学文学部所蔵史料について—17-19 世紀フランス商業辞典・商人手引書—」(九州西洋史学会『西洋史学論集』33 号、1995 年 12 月、77-79 頁)
- 7) 「柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦編『世界歴史大系・フランス史 3』」(『史学雑誌』105 編 6 号、1996 年、111-112 頁)
- 8) 「ニコラス・デ・ランジュ著・板垣雄三監修／長沼宗昭訳『図説世界文化地理大百科—ジューイッシュ・ワールド—』」(『史学雑誌』106 編 3 号、1997 年、123-124 頁)
- 9) 「近代フランス史研究における海の視点について」(地中海学会 20 周年記念『地中海学の 20 年』地中海学会、1997 年 9 月、21-24 頁)
- 10) 「ジャン・ファヴィエ著／内田日出海訳『金と香辛料—中世における実業家の誕生—』」(『史学雑誌』107 編 7 号、1998 年、120-121 頁)
- 11) 「高山博著『ハード・アカデミズムの時代』」(『史学雑誌』107 編 12 号、1998 年、118-119 頁)
- 12) 「東大教師が新入生にすすめる本」(東京大学出版会『UP』330 号、2000 年 4 月、31-32 頁)
- 13) 「ヨーロッパ移民史の視点」(シンポジウム「ヨーロッパ移民の社会史(17-20 世紀)—エスニシティの形成と軌轢をめぐって—」『史学雑誌』110 編 8 号、2001 年、84-87 頁)
- 14) 「西川杉子著『ヴァルド派の谷—近代ヨーロッパを生きぬいた異端者たち—』」(『史学雑誌』112 編 7 号、2003 年、129 頁)
- 15) 「国際商業史と比較経済史—馬場哲氏の書評に答える—」(『史学雑誌』113 編 1 号、2004 年、99-108 頁)
- 16) 「東大教師が新入生にすすめる本」(東京大学出版会『UP』378 号、2004 年 4 月、2-4 頁)
- 17) 「コンファレンス・レポート 日本西洋史学会第 55 回大会公開シンポジウム『ヨーロッパの港町—空間構成と社会動態の比較史』」(『西洋史学』221 号、2006 年 6 月、59-75 頁)
- 18) 「羽田正著『イスラーム世界の創造』」(『イスラーム世界』67 号、2006 年 9 月、64-71 頁)
- 19) 「三報告へのコメント—ヨーロッパ的視点から」(広島大学『史学研究』260 号、シンポジウム特集「中・近世期の港湾都市と海域世界のネットワーク—海・都市・宗教」、2008 年 6 月、58-62 頁)
- 20) Préface à Georges Koutzakiotis, *Cavalla, une Échelle égéenne au XVIIIe siècle. Négociants européens et notables ottomans*. Istanbul: Les Éditions Isis, 2009, pp. 7-10.
- 21) 「Y・グディノー、黒田裕子、O・ド・ベルノンの論文に対するコメント—非業の死と彷徨う靈魂」(池澤優・アンヌ・ブッシィ編『非業の死の記憶—大量の死者をめぐる表象のポ

- リティックス』東京大学大学院人文社会系研究科、2010年3月、333-343頁)
- 22) 「ルネ・レモン著、工藤庸子・伊達聖伸訳・解説『政教分離を問いなおす—EU とイスラムのはざま—』」(『史学雑誌』119編9号、2010年、115-116頁)
- 23) « De la mort violente à l'âme errante. Réflexion sur les articles d'Yves Goudineau, Kuroda Hiroko et Olivier de Bernon », in : Anne Bouchy et Ikezawa Masaru (éd.), *La mort collective et le politique. Constructions mémorielles et ritualisations*. Tokyo : Institut des sciences humaines et sociales, Université de Tokyo, 2011, pp. 313-320.
- 24) 「回顧と展望 2010年の歴史学界 総説」(『史学雑誌』120編5号、2011年、1-5頁)
- 25) 「回顧と展望 2011年の歴史学界 総説」(『史学雑誌』121編5号、2012年、1-5頁)

V. 事典執筆

- 1) 「重商主義」「重商主義戦争」(『歴史学事典』第7巻、加藤友康編『戦争と外交』弘文堂、1999年12月、304-307頁)
- 2) 「フランス東インド会社」(辛島昇他編『新訂増補・南アジアを知る事典』平凡社、2002年4月、893頁)
- 3) 「関税」「コルベルティスム」(『歴史学事典』第12巻、黒田日出男編『王と国家』弘文堂、2005年2月、159-160、297-298頁)
- 4) 「コルベルティスム」「ナントの勅令」(猪口孝他編『国際政治事典』弘文堂、2005年11月、384、724-725頁)
- 5) 「商人資本」「国際分業」(『歴史学事典』第13巻、川北稔編『所有と生産』弘文堂、2006年4月、187-189、285-287頁)
- 6) 「港」(『歴史学事典』第14巻、加藤友康編『ものとわざ』弘文堂、2007年6月、572-573頁)
- 7) 「契約」(『歴史学事典』第15巻、樺山紘一編『コミュニケーション』弘文堂、2008年6月、185-188頁)
- 8) « Métropole maçonnique : Marseille au XVIIIe siècle », in : Pierre-Yves Beaurepaire (dir.), *Dictionnaire de la franc-maçonnerie*. Paris : Armand Colin, 2014 (à paraître), pp. 175-178.

VI. 随筆・対談・講演要旨・非学術刊行物・教科書その他

- 1) 「異郷生活の気晴らしについて—レヴァントのフランス商人—」(『地中海学会月報』193号、1996年10月、5頁)
- 2) 「自著を語る：ポール・ビュテル著『近代世界商業とフランス経済』」(『地中海学会月報』210号、1998年5月、5頁)
- 3) 「港のなかの異文化」(『地中海学会月報』221号、1999年6-7月、6頁)
- 4) 「泉と芸術のあるお洒落な街、エクサン・プロヴァンス」(『週刊朝日百科・世界100都市』14号『アルルとアヴィニョン』朝日新聞社、2002年2月、20-21頁)

- 5) 「海と共に生きてきたコート・ダジュール」、「地中海の香りただよう港町マルセイユ」、「コート・ダジュールの女王ニース」(『週刊朝日百科・世界 100 都市』15 号『コート・ダジュール』朝日新聞社、2002 年 3 月、4-9 頁)
- 6) 「大西洋と大河に育まれた二都」(『週刊朝日百科・世界 100 都市』17 号『ボルドーとナント』朝日新聞社、2002 年 3 月、11-13 頁)
- 7) 「自著を語る『海港と文明—近世フランスの港町』」(『地中海学会月報』258 号、2003 年 3 月、7 頁)
- 8) 「港町の歴史的景観とその未来—フランスの事例から—」(日本港湾協会『港湾』80 号、2003 年 10 月、8-11 頁)
- 9) 「空間性と時間性のなかのヨーロッパとイスラーム世界—地域間交流史の諸相から—」(羽田正との対談、『クリオ』18 号、2004 年 5 月、1-36 頁)
- 10) 「東北の港町からフランスの港町へ—景観と空間構成の比較—」(『東北学院大学東北産業経済研究所紀要』23 号、2004 年 3 月、公開シンポジウム「港町景観の歴史とその将来」記録、30-43 頁)
- 11) 「港町の表象」、「移動する人々とフリーメイソン世界共和国」(工藤庸子・池上俊一編『都市と旅—フランス語で世界を読む』放送大学大学院文化科学研究科・言語文化研究Ⅱ、放送大学教育振興会、2005 年 3 月、143-179 頁)
- 12) 「横浜から世界の港町へ—文明史的視点」(市民文化形成支援研究会編『都市、文化、社会—市民文化形成支援研究序説』第 2 巻・横浜開港 150 年記念シンポジウム記録集、春風社、2005 年 3 月、49-55 頁)
- 13) 「更紗交易とアルメニア人による捺染技術の伝播」(小笠原小枝監修『別冊太陽・更紗』平凡社、2005 年 12 月、194-197 頁)
- 14) 「トリエステの海岸通り」(『地中海学会月報』286 号、2006 年 1 月、1, 8 頁)
- 15) 「ヨーロッパのプリント技術、その起源と発達」(国立民族学博物館特別展示『更紗今昔物語—ジャワから世界へ』カタログ、財団法人千里文化財団、2006 年 9 月、70-71 頁)
- 16) 「淡青評論—虚実の彼岸」(『東京大学学内広報』1353 号、2007 年 2 月、24 頁)
- 17) 「海から見てくるヨーロッパ文明の形成過程—沿海岸港と河口内港」(『水の文化』25 号「水の文化・舟運気分」ミツカン水の文化センター、2007 年 2 月、40-43 頁)
- 18) (新聞インタビュー) "Un regard japonais sur les ports lorientais", *Ouest-France*, vendredi 8 juin 2007.
- 19) (新聞インタビュー) 「著者に聞く—商人と更紗」(『東京大学新聞』2008 年 1 月 15 日)
- 20) 「更紗のむすぶ人の縁」(東京大学出版会『UP』424 号、2008 年 2 月、38-43 頁)
- 21) 「グローバル・ヒストリー雑感」(東京大学大学院人文社会系研究科『多分野交流プロジェクト研究ニューズレター』58 号、2008 年 6 月、頁不表示)
- 22) 「自著を語る『商人と更紗—近世フランス＝レヴァント貿易史研究』」(『地中海学会月報』311 号、2008 年 6-7 月、11 頁)

- 23) 「マルセイユ—東方の門戸」(竹中克行・山辺規子・周藤芳幸編『朝倉世界地理講座—大地と人間の物語 第7巻 地中海ヨーロッパ』朝倉書店、2010年2月、190-196頁)
- 24) 「友愛と秘密への道のり」(東京大学出版会『UP』461号、2011年3月、20-24頁)
- 25) 「秘儀伝授における死の象徴性—モーツァルトの『魔笛』をめぐって」(『死生学 DALS ニューズレター』28号、2011年3月、2頁)
- 26) 「小花模様の茜染更紗、またはヨーロッパ擦染の起源について」(京都服飾文化研究財団『Dresstudy』Vol. 59、2011年4月、4-9頁)
- 27) 「高校世界史と大学の歴史教育を結ぶもの」(日本学術協力財団『学術の動向』2011年10月、24-27頁)
- 28) « The Symbolism of Death in Initiation Rites: The Case of Mozart's Magic Flute », *Death and Life Studies Newsletter*, The University of Tokyo Global COE Program, No. 28-29, November 2011, p. 2.
- 29) 「現代世界と宗教」(『TASC Monthly』451号、2013年7月、3頁)

VII. 翻訳

- 1) ミシェル・モラ・デュ・ジュールダン著『ヨーロッパと海』(平凡社、1996年9月)
- 2) ポール・ビュテル著『近代世界商業とフランス経済—カリブ海からバルト海まで—』(深沢克己・藤井真理共訳、同文館、1997年12月)
- 3) (監修) アンドレ・ジスベール、ルネ・ビュルレ著『地中海の覇者ガレー船』(遠藤ゆかり・塩見明子訳、創元社、1999年11月)
- 4) (編訳) ピエール＝イヴ・ボルペール著『「啓蒙の世紀」のフリーメイソン』(山川出版社、2009年4月)

VIII. 学会発表・講演・シンポジウム

- 1) 「18世紀マルセイユ商業史の史料と研究史の現段階」(九州史学会大会・研究発表、九州大学、1986年12月)
- 2) 「18世紀におけるマルセイユ＝アレppo貿易」(土地制度史学会秋季学術大会・研究発表、鹿児島大学、1987年10月)
- 3) 「地中海—港と国際商業」(地中海学会第16回大会・シンポジウム、大分県佐伯市、1992年7月)
- 4) 「ルー商会文書の為替手形—18世紀マルセイユ商業史研究—」(九州史学会大会・研究発表、九州大学、1992年12月)
- 5) 「18世紀の地中海商業と国際金融—ルー商会文書の為替手形—」(九州史学会大会・公開講演、九州大学、1993年12月)
- 6) 「マルセイユの海運業者ジョルジュ・ルーの生涯」(鄭成功生誕370周年記念シンポジウム「大航海時代の平戸と鄭成功」、平戸文化センター、1994年7月10日)

- 7) 「フランス港湾都市の調査研究報告」(九州史学会大会・研究発表、九州大学、1994 年 12 月)
- 8) 「異郷生活の気晴らしについて—レヴァントのフランス商人—」(ブリヂストン美術館土曜講座・地中海学会連続講演会、ブリヂストン美術館ホール、1996 年 7 月 20 日)
- 9) 「近世ヨーロッパ商業空間とディアスポラ」(史学会第 94 回大会、東洋史・西洋史合同シンポジウム「ディアスポラの開く商業空間」1996 年 11 月 10 日)
- 10) « Marseille, porte du Levant. Un essai de comparaison », in: *Congrès du cinquantenaire de la Fédération historique du Sud-Ouest* (Bordeaux, Musée de l'Aquitaine, 26 avril 1997).
- 11) 「港のなかの異文化」(ブリヂストン美術館土曜講座・地中海学会連続講演会、ブリヂストン美術館ホール、1999 年 4 月 17 日)
- 12) 「近世フランス港湾都市における商人社会の編成—地域間結合と国際ネットワーク—」(科研費・創成的基礎研究「現代イスラーム世界の動態的研究」第 5 班 b グループ「地域間交流史の諸相」第 2 回研究会、東京大学・東洋文化研究所、2000 年 1 月 8 日)
- 13) 「ヨーロッパ移民の社会史 (17-20 世紀) —エスニシティの形成と軋轢をめぐって—問題提起」(史学会例会シンポジウム、東京大学史料編纂所大会議室、2000 年 6 月 24 日)
- 14) 「近世フランスの四大港町—成長過程と空間構造—」(科研費・創成的基礎研究「現代イスラーム世界の動態的研究」第 5 班 b グループ「地域間交流史の諸相」第 5 回研究会「港町のトポグラフィ—港湾施設と市街構造の比較史的研究—」、九州大学・文学部、2001 年 6 月 30 日)
- 15) « Urban Topography and Merchant Circles of Marseilles in the Eighteenth Century », in: *The Dynamism of Muslim Societies. Toward New Horizons in Islamic Area Studies. An International Symposium of the Islamic Area Studies* (October 5-8, 2001, Kazusa Arc, Japan), Session 3 : "Ports, Merchants and Cross-Cultural Contacts" (October 6).
- 16) 「ヨーロッパ商人とイスラーム世界」(朝日カルチャーセンター「イスラーム文明の過去・現在・未来—暮らしのなかのイスラーム」第 6 回、新宿校、2002 年 1 月 19 日)
- 17) 「移民・旅人・亡命者—近代史への新視点」(朝日カルチャーセンター「交流と移動のヨーロッパ近代史—移動する人々の群像—」第 1 回、横浜校、2002 年 4 月 13 日)
- 18) 「宗教戦争からフリーメイソンまで—国境を越える信仰と思想—」(朝日カルチャーセンター「交流と移動のヨーロッパ近代史—国際空間のなかの宗教と結社—」第 1 回、横浜校、2002 年 10 月 12 日)
- 19) « Topographie et urbanisme de Marseille au XVIIIe siècle. Essai d'histoire comparée », in: *Histoire moderne. Séminaire commun de DEA* (Université de Paris IV-Sorbonne, Institut de recherches sur les civilisations de l'Occident moderne, le 20 mars 2003).
- 20) 「商人社会のなりたち—立身・結婚から子弟教育まで—」(朝日カルチャーセンター講座「交流と移動のヨーロッパ近代史—商人と国際交易のひろがり—」第 1 回、横浜校、2003 年 4 月 12 日)

- 21) 「東北の港町からフランスの港町へ—景観と空間構成の比較—」(東北学院大学・東北産業経済研究所公開シンポジウム「港町景観の歴史とその将来」、東北学院大学押川記念ホール、2003年9月29日)
- 22) 「ヨーロッパ国際都市のフリーメイソン—友愛と社交の世界共和国—」(朝日カルチャーセンター講座「交流と移動のヨーロッパ近代史—都市、出会いの十字路—」第1回、横浜校、2003年10月11日)
- 23) « L'acceptation et l'exclusion de l'autre dans l'histoire française moderne », in : *L'autre de l'oeuvre. Colloque international organisé par les universités de Tokyo, de Genève et de Paris VIII* (Université de Tokyo, Sanjo Conference Hall, le 15 novembre 2003)
- 23) 「フランス港湾都市における倉庫」(歴史学会月例研究会「倉庫から見た国家」第8回、日本女子大学、2004年1月9日)
- 24) (司会・問題提起)「近代ヨーロッパ国際商業の成長要因と停滞要因—国家・市場・商人の役割—」(社会経済史学会第73回全国大会・パネルディスカッション、大阪市立大学、2004年5月30日)
- 25) (司会)「16世紀以後のユーラシアにおける文化交流」(第2回日仏コローク「ユーラシアにおける文化の交流と転変(II)」東京大学・フランス高等研究院共催、東京日仏会館、2004年10月2日)
- 26) 「石巻からフランスへ—河川に面した港町—」(東廻り航路フォーラム II「石巻の港町景観—その歴史と現在」東北学院大学オープンリサーチセンター主催、日本製紙石巻工場「健保ひたかみ」、2004年10月24日)
- 27) (コメンテータ)「貿易・港湾都市の国際比較—都市ヨコハマの文化の原点を探る」横浜市立大学・市民文化形成支援研究会主催、横浜開港資料館講堂、2004年12月5日)
- 28) (Présidence) « Nouvelles réalités et réajustements : stratégies en Méditerranée », in : *Crises, conflits et guerres en Méditerranée (XVIe-XXe siècles) : Histoire et géostratégie. Colloque international, Nice, les 17, 18 et 19 mars 2005* (Université de Nice Sophia-Antipolis, Centre de la Méditerranée moderne et contemporaine, le 18 mars 2005).
- 29) 「問題提起—諸文明の界面」「近世のマルセイユとボルドー—空間性と他者性の比較論」(日本西洋史学会第55回大会・公開シンポジウム「ヨーロッパの港町—空間構成と社会動態の比較史」神戸大学文学部、2005年5月14日)
- 30) « Entre la franchise et la prohibition : la question des cotonnades levantines à Marseille au XVIIIe siècle », in : *La Loi, entre adhésions et résistances. Journée d'études, Aix-en-Provence* (Maison Méditerranéenne des Sciences de l'Homme, le 17 juin 2005).
- 31) (Présidence) « Lumières, sociabilité et espace public: le XVIIIe siècle », in : *La franc-maçonnerie en Méditerranée (XVIIIe-XXe siècles). Modèles, circulations, transferts. Colloque international des 27-28-29 octobre 2005* (Université de Nice Sophia-Antipolis, Bibliothèque universitaire, le 27 octobre 2005).

- 30) 「18 世紀マルセイユのフリーメイソン—研究史・史料・問題提起」(日本西洋史学会第 56 回大会・自由論題報告、千葉大学工学部、2006 年 5 月 14 日)
- 31) 「近世レヴァント貿易の歩み—ペルシア生糸からマケドニア綿花まで」(朝日カルチャーセンター講座「地中海世界とイスラーム」第 5 回、横浜校、2006 年 12 月 2 日)
- 32) « Les grandes étapes du commerce du Levant à l'époque moderne », in: *Séminaire d'Histoire maritime* (Université de Paris IV-Sorbonne, Institut de recherches sur les civilisations de l'Occident moderne, le 19 décembre 2006)
- 33) 「染織技術を伝えた隊商の道—トルコ更紗とアルメニア商人」(朝日カルチャーセンター講座「地中海世界とイスラーム」第 7 回、横浜校、2007 年 1 月 6 日)
- 34) « De l'Inde au Levant: routes du commerce, routes des indiennes », in: *Le goût de l'Inde. L'impact culturel des échanges commerciaux entre l'Inde et l'Europe aux XVIIIe et XIXe siècles* (Colloque à l'Université de Bretagne-Sud, Lorient, le 4 juin 2007).
- 35) « Enseignement et recherches sur l'histoire européenne au Japon: Quelques éléments historiographiques », in: *Séminaire d'histoire moderne* (Université de Bretagne-Sud, Faculté de lettres, sciences humaines et sociales, le 11 juin 2007).
- 35) (ディスカッサント)「中・近世期の港湾都市と海域世界のネットワーク—海・都市・宗教」(広島史学研究会大会シンポジウム、広島大学大学院文学研究科、2007 年 10 月 27 日)
- 36) (コメンテータ)「非業の死の記憶—追悼儀礼のポリティクス」(東京大学グローバル COE プログラム「死生学の展開と組織化」・フランス国立極東学院・トゥルーズ大学社会人類学センター共催研究集会、東京大学、2008 年 9 月 19 日)
- 37) 「更紗の東西交易とヨーロッパ捺染の起源」(五島美術館特別展「古渡り更紗—江戸を染めたインドの華」記念講演会、五島美術館、2008 年 10 月 25 日)
- 38) (司会・趣旨説明)「信仰における他者—異宗教・異宗派の受容と排除の比較史論」(史学会第 106 回大会・公開シンポジウム、東京大学文学部、2008 年 11 月 8 日)
- 39) « Du Rite Français au Rite Écossais Rectifié: le choix de la Loge de la Triple Union de Marseille à la fin du XVIIIe siècle », in: *Diffusions circulations des pratiques maçonniques en Europe et en Méditerranée, XVIIIe-XIXe siècles. Colloque international des 2 et 3 juillet 2009* (Université de Nice-Sophia Antipolis, le 2 juillet 2009).
- 40) 「フランスの港町—地中海と大西洋の岸边から」(NHK 文化センター青山教室・地中海講座「フランスと地中海—太陽の誘惑」、2009 年 8 月 17 日)
- 41) 「高校世界史と大学の歴史教育とを結ぶもの」(日本西洋史学会第 60 回大会大シンポジウム「世界史教育の現状と課題」、別府国際コンベンションセンター、2010 年 5 月 29 日)
- 42) (Modérateur de table ronde) « Le jansénisme : spiritualité et polémique », in: *Journée d'études dix-septiémistes françaises au Japon : théâtre, poésie, philosophie, histoire des idées* (Université Waseda, le 3 novembre 2010).
- 43) (Chairman and comments) The first international workshop: “Religious Conflict, Religious Concord

- in Europe and the Mediterranean World” (University of Tokyo, Sanjo Conference Hall, November 23, 2010).
- 43) 「フランスの地中海港—時間と空間のなかのマルセイユ」(港湾空間高度化環境研究センター主催・第14回「港と文化を語る集い」、海運クラブ、2011年2月24日)
- 44) (Chairman and comments) The second international workshop: “Religious Conflict, Religious Concord in Europe and the Mediterranean World” (University of Tokyo, Institute for Advanced Studies on Asia, Grand assembly room, October 29, 2011).
- 45) 「港町マルセイユ—東方の門戸」(朝日カルチャーセンター講座「地中海都市の肖像」第5回、横浜校、2011年11月19日)
- 46) 「啓蒙の世紀のフリーメイソン—石工伝説から騎士伝説へ」(東洋大学白山史学会第49回大会公開講演、東洋大学、2011年11月26日)
- 47) (コメンテータ)「コメント2」(日本西洋史学会第62回大会小シンポジウム「近世ヨーロッパの宗教と政治—宗派分裂の作用と反作用」明治大学、2012年5月20日)
- 48) 「啓蒙期ヨーロッパのインド趣味—更紗流行の社会文化史的意義について」(国際服飾学会第31回大会・創立30周年記念講演、大妻女子大学、2012年6月9日)
- 49) 「近世レヴァント貿易とマルセイユ—商品流通と「離散の民」の商業ネットワーク」(朝日カルチャーセンター講座「地中海世界の都市と交易—街道・海道を辿る」第10回、横浜校、2012年9月1日)
- 50) 「相剋と融和のヨーロッパ宗教社会史—序説に代えて」(朝日カルチャーセンター講座「宗教の世界史—対立・共存・融和」第1回、新宿校、2012年10月8日)
- 51) (Introduction, comments and conclusion) The international symposium: “Religious Conflict, Religious Concord in Europe and the Mediterranean World” (University of Tokyo, Komaba Campus, Bldg. 18, Grand Hall, October 20-21, 2012)
- 52) 「相剋と融和の近世ヨーロッパ宗教社会史—共同研究の成果と展望」(同志社大学文化史学会大会公開講演、同志社大学、2012年12月1日)
- 53) 「ユーラシア諸宗教間の永続的対話—総合の試み」(朝日カルチャーセンター講座「宗教の世界史—対立・共存・融和」第12回、新宿校、2013年4月8日)
- 54) (コメンテータ)『『世俗化』史観の再検討—フランス近世史からの眺望』(日本西洋史学会第63回大会小シンポジウム「ヨーロッパ近代のなかのカトリシズム—宗教を通して見るもうひとつの『近代』」京都大学、2013年5月12日)
- 55) « Claude-François Achard et le début troublé de la Loge de la Triple Union de Marseille », in : *Claude-François Achard, un grand Marseillais méconnu*. Colloque tenu par l’IMF-Provence et l’Académie de Marseille (Marseille, Bibliothèque de l’Alcazar, 18 octobre 2013).

IX. 研究助成

- 1)平成6年度村田学術振興財団・研究者海外派遣援助「地理＝歴史学的観点に基づくフラン

ス港湾都市の類型学的研究」(研究代表者)

- 2)平成 6-8 年度文部省科学研究費補助金・基盤研究 B-2「18 世紀ヨーロッパ商業実務書類の基礎研究」(研究代表者)
- 3)平成 10-12 年度文部省科学研究費補助金・基盤研究 B-2「西欧の歴史世界とコミュニケーション」(研究分担者)
- 4)平成 9-13 年度文部省科学研究費補助金・創成的基礎研究「現代イスラーム世界の動態的研究」第 5 班 b グループ「地域間交流史の諸相」(平成 11-13 年度研究分担者)
- 5)平成 13-15 年度文部省科学研究費補助金・基盤研究 B-2「ヨーロッパにおける宗教的寛容と不寛容の生成・展開に関する比較史的研究」(研究代表者)
- 6)平成 16 年度三菱財団助成「近世フランス港湾都市の社会空間と広域ネットワークに関する動態的研究」(研究代表者)
- 7)平成 17-19 年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 B「ヨーロッパにおける宗教的・密儀的な団体・結社に関する比較社会史的研究」(研究代表者)
- 8)平成 17-19 年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 B「古代・中世・近現代ヨーロッパ港湾都市の空間構成と社会動態に関する比較史的研究」(研究分担者)
- 9)平成 17-20 年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 A「17-18 世紀アジア諸地域の港町における異文化交流の諸相の比較研究」(研究分担者)
- 10)平成 17-22 年度日本学術振興会科学研究費補助金・特定領域研究「海域比較研究—インド洋海域世界と地中海海域世界における地域間交流の諸相—」(研究分担者)
- 11)平成 18 年度日本学術振興会科学研究費補助金・研究成果公開促進費「信仰と他者」(代表者)
- 12)平成 21-24 年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 A「ヨーロッパ・地中海世界における異宗教・異宗派間の相剋と融和をめぐる比較史研究」(研究代表者)
- 13)平成 21-25 年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 S「ユーラシアの近代と新しい世界史叙述」(研究分担者、平成 21 年度、連携研究者、平成 22 年度)
- 14)平成 22 年度日本学術振興会科学研究費補助金・研究成果公開促進費「友愛と秘密のヨーロッパ社会文化史」(代表者)
- 15)平成 23-26 年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 B「フランス近代作家の歴史意識」(研究分担者)
- 16)平成 26 年度日本港湾協会研究奨励助成「マルセイユを中心とするフランス港湾都市の歴史地理学的・社会文化史的研究」(研究代表者)

X. 主たる学外活動

- 1)東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員 (1990-2001 年)
- 2)史学会評議員 (1996 年—)
- 3)史学雑誌編集委員 (2000-2005 年)

- 4)史学会監事（2000-2002 年）
- 5)大学評価・学位授与機構、学位審査会専門委員（2000-2004 年）
- 6)史学会理事（2002-2004, 2007-2009 年）
- 7)日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員（2003-2004 年、2007-2009 年）
- 8)臨海部都市再生事業における水際線施設の一体整備に関する調査委員会委員（2004 年）
- 9)日本学術振興会特別研究員等審査会委員（2004-2005 年）
- 10)（財）港湾空間高度化環境研究センター主催みなと文化研究会委員（2005-2006 年）
- 11)国立民族学博物館共同研究員（2006 年）
- 12)日本学術会議連携会員（2006 年－）
- 13)membre associé du Centre de la Méditerranée moderne et contemporaine de l'Université de Nice-Sophia Antipolis (2006-)
- 14)membre du Comité de lecture des *Cahiers de la Méditerranée* (2006-)
- 15)史学会理事長（2010-2012 年）
- 16)membre du Comité de lecture de la collection « Franc-maçonnerie » aux Éditions Classiques Garnier (2012-)



